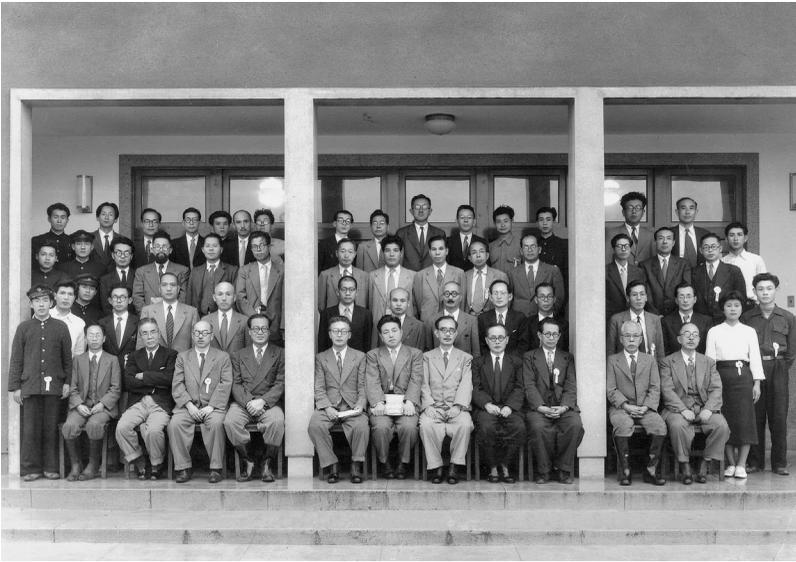


九州中国学会五十年史

九州中国学会

# 九州中国学会五十年史



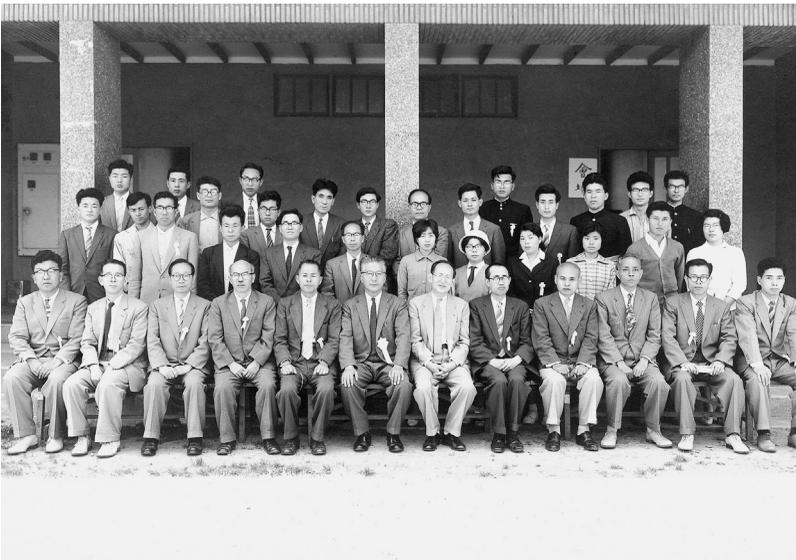
[ 1 ] 昭和29年度(第2回)大会(福岡学芸大学)



[ 2 ] 昭和30年度(第3回)大会(鹿児島大学)



[ 3 ] 昭和31年度(第4回)大会(九州大学)



[ 4 ] 昭和35年度(第8回)大会(長崎大学)



[ 5 ] 昭和46年度(第19回)大会(久留米高専)



[ 6 ] 昭和50年度(第23回)大会(都城高専)



[ 7 ] 昭和44年度大会(福岡教育大学)研究発表



[ 8 ] 平成14年度大会(九州大学)研究発表



[ 9 ] 平成14年度大会シンポジウム「九州中国学会五十年の歩み」



[10] 平成14年度(第50回)大会(九州大学)



## 序 文

九州中国学会が創立五十周年を迎えることになった。時間は人が何もせずともただ流れて逝くものである以上、五十年という区切りそれ自体には格別の意味があるわけではない。だが、学問研究の領域において共同で切磋琢磨しようとする研究者たちがおり、その人々の意志と営為が五十年にわたって、次々と継承され途切れることなく続いてきたとすれば、それは単なる時間の区切りにとどまるはずのものではあるまい。ずっしりと重い学問の蓄積こそが時間の内実だろうからである。

九州中国学会はアジア諸国に最も近くに位置する九州の地で、中国学に志す研究者たちによって発起された。五十年前のことである。「最初内輪の研究団体として発足」した学会は「さゝやかながら、学術的な集まりとして恥しからぬものたらしめるやう経営された所に苦心があった」と学会報「発刊の辞」が記すように、単なる同学の集いとは異なる高い志をふくんで出発したのである。編集委員会は、本書において、その五十年の歩みを通史的に振り返るだけでなく、また写真、記録資料、回想記などによって多面的に記述し、この学会の歴史を浮き彫りにしようとした。編集委員会の苦心により、われわれは本書によって、日本の中国学の中心を形作ってきた九州の錚錚たる研究者たちの活躍ぶりを窺うことができる。九州における中国学研究五十年の、研究領域や主題、研究上の問題意識、方法など変遷を知ることができる。「学術的な集まりとして恥しからぬもの」という先人の初志、初心が

五十年という時間の中で貫かれてきたことをはつきりと知ることができるのである。

五十年の伝統（「研究の蓄積」）を継承し、さらにそれを發揮していくことが、われわれ後学の責務であることはいうまでもないが、その蓄積を解体し、その中から新たな発展の方向を探ることもわれわれに課せられた任務であるだろう。本書の読者にはこれを伝統の 継承 と 解体 の双方の視点から読んでいただけたらと思う。そのことで学会のみならず、われわれ後学の役に立つものであってほしいと願うのである。

最後に末筆ながら本書刊行のために奮励された編集委員会、原稿執筆者、資料提供者はじめ関係の全ての方々、五十年の歴史を共同で作り上げてこられた過去から現在までの全ての会員に心からの謝意を表わし、序文を終える。

二〇〇四年四月

九州中国学会会長

岩 佐 昌 暲

# 目次

## 序文

## 第一部 通史

一、九州中国学会の発足	2
二、九州中国学会の前身	4
三、草創期の九州中国学会	6
1 組織と大会	6
2 学会報	7
四、大会開催と学会報発行	9
1 大会	9
2 学会報	12
五、会則・会員・会費	14
六、運営組織の改革	16
七、現状と課題	18

## 第二部 回想

九州中国学会と私の思い出	平岡 禎吉	22
草創期の九州中国学会	上尾 龍介	24
九州中国学会と恩師の方々	大塚 博久	29
九州中国学会草創期の研究者の動向	秋吉久紀夫	34
九州中国学会五〇年の歩み(昭和三〇、四〇年代を中心に)	疋田 啓佑	41
「九州中国学会」開催校を三度して	永末 嘉孝	47
九州中国学会のことなど	會澤 卓司	51
九州中国学会の思い出	岡村 繁	55
思い出すままに	町田 三郎	61

## 第三部 史料

①九州大学中国学会研究発表一覧(1)	⑥「九州中国学会報」目次(第一巻、第三巻)
②九州大学中国学会研究発表一覧(2)	⑦昭和三十三年度九州地区中国学会・西日本中国語文学会研究発表一覧
③九州大学中国学会研究発表一覧(3)	⑧昭和四十六年度九州中国学会大会日程表
④第一回九州中国学会大会研究発表一覧	⑨東方学会・九州中国学会共催公開学術講演会一覧
⑤第二回九州中国学会大会研究発表一覧	

- 10 九州中国学会大会開催校と学会報発行一覧
- 11 学会報編輯世話人一覧
- 12 昭和四十七年度(第二十回)九州中国学会大会参加者名簿
- 13 平成十四年度(第五十回)九州中国学会大会参加者名簿
- 14 大会出席者数・会員数・学会費・学会報発行一覧
- 15 『九州中国学会報』 会報編輯規定
- 16 九州中国学会会則
- 17 九州中国学会役員
- 18 九州中国学会会則(現行)
- 19 九州中国学会役員選出規定
- 20 九州中国学会会員入退会規定
- 21 九州中国学会会員資格について(内規)
- 22 九州中国学会理事会運営内規

あとがき

第一  
部  
  
通  
  
史

## 一、九州中国学会の発足

九州中国学会が発足したことを直接に知る資料としては、初代会長をつとめられた楠本正継先生（当時九州大学文学部教授）による『九州中国学会報』の「発刊の辞」なるものがある。この「発刊の辞」は、昭和三十年度『九州中国学会報』創刊号（記載はない）には無く、昭和三十一年度『九州中国学会報』第二巻の巻頭に収載されている。この「発刊の辞」には次のようにある。

九州中国学会は最初内輪の研究団体として発足し、毎年発表会を催してきた。それはさ々やかながら、学術的な集まりとして恥しからぬものたらしめるやう経営された所に苦心があつた。九州諸大学並びに其他から、特に協力を賜つたのも主に此意に係つてゐたと思はれる。こゝろ三三年来、例会は規模を増し、漢文教育の討議も併せ行はれて、出席人員は著しく加るに至つた。

会報の印刷が決定したのは此情勢下、会員の一致した希望で、慶びに堪へない。たゞ此際、心から願はしいのは発表されるものが何処までも最初の真面目な性質を失はないことである。理論的なものにせよ、實際的なものにせよ、それは問ふ所であるまい。会報は成つた。九州中国学会は新たに衆目の見る所によつて、批判を受けねばならないであろう。尚、本号の編輯は偏に鹿児島大学平岡教授の御盡力の賜物である。深く感謝の意を表する。

右の文にある「内輪の研究団体」に関して岡田武彦先生におたずねしたところ、昭和二十四年ごろ

「九大中国研究会」なるものがあつて、熊本から友枝龍太郎先生なども参加されていたとのことであつた。

昭和二十四年（一九四九）四月一日に文部省令第十号により、九州大学法文学部から文学部が分立し、同年五月三十一日に学制改革にともない新制の九州大学が発足する。九州大学には当時、旧制と新制の学生が同時に在学していたのである。戦後間もない頃で、新しい時代の到来に応じて学問研究の姿勢も新しい時代にふさわしいものに醸成されつつあつたと思われる。「九州諸大学並びに其他から、特に協力を賜つた」と「発刊の辞」にあるのは、九州大学を中心に山口大学・広島大学の諸先生方も熱心に参加されていたからである。「漢文教育の討議も併せ行はれて」というのは、第二部の平岡禎吉先生の文章をご参照願いたい。

この「発刊の辞」が掲載されている『九州中国学会報』第二巻の巻末に「九州中国学会開催校」として、「昭和二十八年度 大分大学、二十九年度 福岡学芸大学、三十年度 鹿児島大学、三十一年度 九州大学」と記されている。これによれば、最初の九州中国学会の開催は昭和二十八年であつたことがわかる。平岡先生の文章によると、第一回九州中国学会が大分大学で開かれる前に九州大学で各県代表の会が開かれ、各県の世話人が決まつたとある。こうして九州中国学会が発足したのである。

## 二、九州中国学会の前史

「日本中国学会報」第二集（昭和二十六年三月）の彙報の記載によれば、九州中国学会の前身である「九州大学中国学会」は、早く、昭和二十二年五月二十五日より学会活動が始められている（史料1）。この「九州大学中国学会」は昭和二十八年五月二十三・二十四日に大分大学学芸学部で第一回の九州中国学会が開催された年にも、六月十四日・十一月十四日・十二月十九日に開かれていて、同年から「九州大学中国学会」と明記して「九州中国学会」と区別している（史料4）。さらに昭和十九年六月五日・六日に第二回の九州中国学会が福岡学芸大学で開催されたが、同年「九大中国学会」は五月二十一日と九月十八日に開かれている（史料5）。そして「九大中国学会」の記録はこの年まで、以後その名称は出てこない。「九州大学中国学会」は昭和二十二年より昭和二十九年まで毎年開かれていたことになる。

この「九州大学中国学会」については、荒木見悟先生（当時福岡学芸大学助教）が、「昭和二十四年十一月五日（土）晴。中国学術研究発表会を九州大学第七研究室で開く。会する者六十名位、発表者九名。実に研究室はじまつて以来の盛況な発表会であった。昭和二十五年六月十七日、九州大学で学会あり」と記録しておられる。

「九州大学中国学会」は時には「九大中国研究会」とも「中国学術研究発表会」とも称していて、

必ずしも一定の名称ではなかったようである。昭和二十四年の研究発表会は、発表者九名、参加者約六十名というから、すでに学会規模のものであったといえる。昭和二十六年には小規模な研究発表会を含めて二月、五月、六月、十二月と十五名の方々が発表されており、山口大学の湯浅幸孫・石黒俊逸両先生も参加発表されている。同年六月十七日の研究発表会には「大会」と付記してあるので、この年から「大会」が始まったことが分かる（史料2）。昭和二十七年も一月、五月、六月、十月と延べ十四名の方々が発表されており、広島大学の池田末利・岡村繁両先生が参加発表されている。同年五月二十五日の研究発表会も、発表者八名に、楠本正継先生の特別発表が行われているので、「大会」であったと言えるよう（史料3）。

以上のように、昭和二十二年から昭和二十七年までの「九州大学中国学会」の研究発表会開催の動向があった後に、特に昭和二十六年、二十七年両年の「大会」開催を基盤として、昭和二十八年に第一回の「九州中国学会」が大分大学で開催されたのである。

それまで九州大学を会場として行われてきた研究発表の場を九大以外の場に広げ、更に大きく再編成して出発したのが、大分大学における第一回九州中国学会大会であったといえるであろう。

ただ、注目すべきことは、九州大学で開催されていた時から九州大学以外の研究者、さらには九州地区以外の研究者が参加して研究発表会を盛り上げていたということである。

以後、大会は福岡地区と福岡地区以外とで交替で毎年行われるようになる。ただし草創期のための混乱もあったようで、昭和三十二年に熊本女子大学で開催された九州中国学会の要覧には第六回と記

されている。昭和二十八年大分大学開催を第一回とすれば第五回である。おそらく大分大学以前のいわゆる「九州中国学会」をカウントしたのであるうか。今となつては、はっきりとはわからない。

### 三、草創期の九州中国学会

#### 1 組織と大会

九州中国学会の組織は発足当初より、会長一名と各県に委員二名を置いて運営に当たってきた。各県の委員二名の方々が中心になり、大会開催及び学会報の原稿の募集をはじめ会員相互間の連絡を担当した。それは九州地区全体で、できるだけ広く民主的に運営することを目指したためであろう。はじめは各県代表者とは称してなく、委員と称していた（史料16）。後に各県代表者と称し、おおむね大会開催時に、各県代表者会議が開かれた（史料8）。学会事務局は、「九州大学文学部に置く」とあるが、実際の事務は九州大学文学部の中国文学・中国哲学史研究室の歴代の助手が行ってきた。草創期の会員数は、昭和三十一年度の「学会報」第二巻の会員名簿によれば、福岡県は三十六名と筑紫丘高校国語科、大分県は三十一名、宮崎県は七名、鹿児島県は十九名、熊本県は十一名、佐賀県は十名、長崎県は六名、合計一二〇名と団体一である。

第一回の九州中国学会大会は、昭和二十八年（一九五三）五月二十三・二十四の両日に大分大学で

開催された。この年は、九州大学では旧制大学の最後の卒業生と新制大学の最初の卒業生とが同時に卒業した教育史上めずらしい年であった。また同年は「九州中国学会」と「九州大学中国学会」が同時に開催された年でもあった。研究活動も活性化し、将来に対して無限の可能性を約束する画期的な年であったことが想像される。今、初期の大会の発表者一覧（史料4・5・7）ならびに『九州中国学会報』の第一巻から第三巻（史料6）までを見てみると、九州の諸大学や高校の先生方にまじって、昭和二十八年卒業の旧制二名、新制二名の方々が研究発表や論文発表に活躍している姿が目立つ。旧制では上尾龍介・樋口進の両氏、新制では佐藤仁・小西昇の両氏である。第一回から第三回の大会における研究発表の内容を(A)中国文学・語学、(B)中国哲学・文化に分けて、その傾向を見てみると、第一回大会（大分大学）では(A)6 (B)8、第二回大会（福岡学芸大学）では(A)8 (B)10、第三回大会（鹿児島大学）では(A)4 (B)5となり、(A)より(B)の発表者が若干ではあるが多いようである。なお、(A)には現代中国文学、(B)には日本漢学の発表もかなり見られる。

## 2 学会報

創刊号（記載なし）である昭和三十年度『九州中国学会報』は、B五判、四十一頁の謄写版刷りであり、目次によると論文四篇と研究発表のレジメ八篇及び公開講演二件の題目が記されているが、編集後記や会員名簿は記載されていない。昭和三十一年度の第二巻になると、同じくB五判の謄写版刷りながら頁数は一一九頁と増大する。論文数は十四篇と増加し、一篇の分量も第一巻に比して増して

いる。そして「会員名簿」、「県学会情報」さらに会報編集世話人十四名と編輯人一名の一覧表（史料11）、「会報編輯規定」（史料15）などが新たに登場する。第二巻によって『九州中国学会報』は一応の体裁を整えたといえよう。

学会報は第一巻から第四巻までは、当時鹿児島大学教育学部教授の平岡禎吉先生が中心になって編輯されたものと思われる。第二巻と第三巻には編輯人として「平岡禎吉」と明記されている。第四巻では編輯人の明記はないが、発行所は「鹿大教育学部内」とあり、編集後記も平岡先生が書いておられるので、第四巻までは平岡先生が担当されたと思われる（ただし平岡先生ご自身は第三回まで編輯人となったと書いておられる）。

第二巻の学会報から会員名簿が掲載されたが、各県支部ごとの記載である。第二巻から「県学会情報」が記載されて各県の活動状況が広く知られるようになった。ただし、第三巻の「県支部情報」まででこの「情報」は終了している。第二巻末に会報編集世話人として、九州七県に各二人ずつ計十四名の氏名が記載されているが、同巻末の「会報編輯規定」の第三項に「各県に世話人を置いて原稿の採用並びに会員相互間の連絡を計る」とあるので、「会則」第六項にある各県二名の委員が、会報編集世話人を兼ねたようである。なお本誌発行を三月末日とするとあり、そのため原稿締切は十二月末であった。また編集会議のことが明記されるのは第三巻の「編輯規定」からである（史料15）。草創期においては、四月から翌年三月までをその年度とし、五月の大会において年度の方針を決定すると規定されている。

編集後記がはじめて書かれたのは第三巻である。平岡禎吉先生の筆に成る。学会報編集会議の様子も報告されている。第三巻は昭和三十二年三月に鹿児島市武町四十五番地のうすい孔版社で印刷されているが、おそらく第一巻・第二巻も同社で謄写版刷りされたものと思われる。第一巻は一段組み、第二巻は二段組みと一段組みの混合、第三巻は二段組みであるが、第四巻からは一段組みとなる。なお、第一巻から第三巻まで巻末あるいは裏表紙に書店の広告が入っている（写真11）。

#### 四、大会開催と学会報発行

##### 1 大会

当初は福岡県と九州の他県の機関とが隔年に開催校となることを原則として大会行事がなされてきた。しかし平成元年ごろより、福岡県と他県との較差がなくなつたとの判断もあつて、福岡県と他の二県とがローテーションを組み、福岡県は二年に一回から三年に一回程度まわってくるようになった。

昭和五十八年には琉球大学が開催校となり、沖縄県も以後ローテーションに加わつた。大会開催校は通常、大学・高専・短大が引き受けた。しかしながら昭和六十一年度の九州中国学会は九州大学が開催校であつたが、特にその年は、町田会長（当時）の斡旋により、大学から外に出て太宰府天満宮文華殿で開催された。また、平成五年度の大会では、初日は開催校の熊本商科大学で行われたが、懇

親会から会場を阿蘇の司ピラパークホテルに移し、同ホテルに宿泊し、二日目は午前中同ホテルにて研究発表が行なわれた（第二部の永末嘉孝先生の文章を参照）。沖縄県で開催するときは梅雨期を避けて四月に開くよう配慮された。開催時期はおおむね五月中に行われたが、同じく五月に開催されていた東北中国学会とは重ならないように留意された。ちなみに「東北中国学会大会」については、「日本中国学会報」第五集の彙報に「昭和二十八年五月三十、三十一日、於山形大学、此の学会は五月三十日に新しく正式に発足したもので、昨年五月東北大学で行われた大会はその準備会であった。」とある。ほぼ同時に成立した学会であったといえる。

第一回の大分大学における九州中国学会大会は、開催日は二日間で講演が二名、研究発表は十二名であった（史料4）。また講演の代わりにシンポジウムがある大会年もあった（史料8）。さらに講演の代わりに特別発表が組まれた大会年もあった（史料7）。開催日も二日間の場合と一日間の場合とがあり、一日間の場合には、哲学思想部門と文学語学部門の分科会の工夫がなされたこともある。昭和五十四年（一九七九）の第二十七回の熊本大学における大会では、特別講演がコロンビア大学のW・T・ドベリー教授、熊本大学の松本雅明名誉教授、九州大学の岡村繁教授の三先生によって催されたこともある。次年の昭和五十五年度の第二十八回の九州大学における大会からは、東方学会との共催講演会がもたれることとなり、それが平成十年（一九九八）の第四十六回の大大会まで続いた（史料9）。この共催講演会は、東方学会が「会員組織の増強と地域学会との協力を目的として企画され」（「東方学」第六十二輯事業報告九頁）たものであった。東北中国学会は九州中国学会より一年早く、前年度

から公開講演共催が始まっている。この共催の公開講演会は、その費用を東方学会が負担され、地域学会に多大の学問的刺激と交流をもたらした点で、各地域社会に対して非常にいい影響を及ぼしたと言うことができる（第二部の町田三郎先生の文章を参照）。

各年度における研究発表会は断続することなく年一回開催され、講演やシンポジウムも企画されて学会の運営を豊かなものにした。シンポジウムはその時々々のテーマとしてふさわしいものが選ばれて昭和四十五年・四十六年・四十七年・平成三年・平成十一年・十二年・十三年・十四年の計八回開催された。

シンポジウムにすべて講演は第一回大会より、講演あるいは特別講演として数多く開催された。最も印象に残っているのは、九州中国学会の運営が苦しく、学会報が隔年にしか刊行できなかった昭和五十年代に、前述したように東方学会が共催の形式で講演会の講師を派遣して下さっただけでなく、「補助金」を支給して大会・講演会開催に協力して下さったことである。学問的刺激や交流もあったが、そのおかげで学会運営のピンチが救われたのである。

また平成三年（一九九一）五月から平成十年（一九九八）までのあいだに、李炳漢教授（ソウル大）樓宇烈教授（北京大）、郭預衡教授（北京師範大）、戴瑞坤教授（台湾・逢甲大）、陳生保教授（上海外国語大）、潘富恩教授（復旦大）など、韓国・中国・台湾で現役第一線で活躍されている学者を招聘し特別講演の形で学会に参加していただいた。これまた知的刺激とともに交流の輪が広がったのである。

各年度の研究発表者の数は、必ずしも一定していない。第一回の大分大学大会では講演は二名、研究発表は一二名であった。次年度の福岡学芸大学大会では講演が二名で研究発表者は一八名（発表題目は一六）、次の鹿児島大学大会では講演が二名で、研究発表者は九名で構成されていた。その後研究発表者の数は年度によってバラツキがあり、多いときで、十二名か十三名、少ない時には六名か七名という年度もあった。また日程も、草創期はおおむね二日間であったが、第八回あたりから一日の開催となり、約三十年後の平成三年第三十九回大会（九州大学）から二日間の開催となり、今日に至っている（史料10）。各大学の大学院組織の充実により、大学院生の発表が激増するなど、発表者数が増加したことも一つの要因であった。

## 2 学会報

『九州中国学会報』は今年で第四十二巻になるが、前述のように第一回大会が行なわれた二年後の昭和三十年に第一巻が発行された。第三巻まではB五判の謄写版刷りであり、第四巻だけがA五判の活字印刷である。その後、やはり活字印刷は費用の上で無理があるため、タイプ印刷になったようである。第五巻と第六巻は栄光印刷が担当。第七巻から第十一巻までは高浜タイプ印刷、第十二巻から第十六巻までは日昇プリント社が担当している。ここまではB五判のタイプ印刷であった。第十七巻から川島弘文社に替り、写植印刷になり、型もA五判になり、それが平成九年の第三十五巻まで続いた。第三十六巻から城島印刷に替ったが、同じくA五判写植印刷で今日に至っている。その間、費用

の都合で昭和四十九年・五十一年・五十三年・五十五年・五十七年・五十九年・六十一年・六十三年の計八年間、『九州中国学会報』は出版されていない。そして平成元年からは毎年度刊行されて今日に至っている。

学会報第六巻より会員の著書目録及び論文目録が掲載されるようになった。同巻の編集後記によると、鹿児島大学の平岡禎吉先生の提案である、という。

学会報に彙報が載せられたのは第五巻からで、前年度の大会の研究発表題目と第四巻の論文の目次が載せられた。次の彙報は学会報第十巻で、前年三十八年の大会の発表題目と前本学会長楠本正継先生のご逝去の知らせと、楠本先生の業績とお人柄について記されている。第十一巻にも彙報はあり、藤国雄会員のご逝去の通知と同会員の業績について記されている。第十二巻以降も彙報と会員著書及び論文総目は載せられていく。学会報第十七巻になって、更に「執筆者紹介」が載せられる。同巻には「編集後記」があり、写植印刷に変更したことと会費の値上げについて記している。第十八巻の「編集後記」では、本誌の掲載論文は自由投稿制によると明記している。第二十巻には紹介と書評が研究論文のほかに加わっている。ただし同巻より、会員著書、論文総目は掲載されなくなった。前年度の大会の発表題目は第十七巻より記載されなくなった。第二十七巻より、論文のほかに研究ノートに掲載が始まった。第三十一巻で彙報が復活し、前年度の大会の発表題目及び総会における決議事項が載せられるようになった。第三十三巻では資料紹介が加わった。

第三十五巻の学会報に、新たな理事会組織に改革された九州中国学会の新会則及び新役員表が掲載

されている。執筆者紹介は、第十七・十八・二十巻に載り、以後掲載されなかったが、第三十七巻で執筆者紹介欄が復活した。

なお、平成十四年（二〇〇二）の『九州中国学会報』第四十巻の巻末に第一巻から第四十巻までの「既刊総目録」が付録されており、一九五五年から二〇〇二年までの学会活動の一端を知ることができる。

## 五、会則・会員・会費

学会の会則として最初に学会報に掲載されたのは、学会報第十巻（昭和三十九年五月発行）の巻末に載せられたものである（史料16）。九州中国学会は当初この会則で運営されていたことがわかる。

会則は、その後、平成八年度の総会で新たに会則が決議されるまで、最初の会則をほぼ踏襲してきた。ただし、会費の増額と特別会員の会費免除及び平成四年（一九九二）の総会で、それまでの会長一名、各県の委員二名のほかに監査一名を新たに置くことが決議されるなどの変更はあったが、基本は殆んど変わっていない。

会員数は昭和二十八年発足当時については資料がないので判明しない。しかし学会報第二巻（昭和三十一年発行）の会員名簿では一一一名とあり、同第三巻の会員名簿には一二〇名とあるので、発足

当時も一二〇名前後であったのではないかと推測される。

以後、会員数は一二〇名前後が続いたごとくで、学会報第八巻（昭和三十七年発行）によれば会員数は一一八名（維持会員二十八名を含む）であった。その後、昭和三十八年（一九六三）には会員数は一一九名で、以後約十年間は一二〇名前後で推移したが、しかし昭和四十五年（一九七〇）には会員数は一〇〇名に減少している。その後、会員数は徐々に増加し、昭和五十八年（一九八三）には一五二名となり、平成元年（一九八九）には一九一名となり、平成七年（一九九五）には二二〇名と二百名を越える会員数となった（以上、各年度の学会報の会員名簿による）。平成三年（一九九一）四月に会員数は一八六名となり、平成八年（一九九六）には二〇〇名を超えて二一八名となった（以上、学会報第三十九巻と第四十四巻の会員名簿による）。そして平成十年以降は、財政上の理由で学会報に会員名簿は記載せず、別刷となった。平成十三年（二〇〇一）四月には、会員数は二六六名と増加した。その内訳は特別会員が十一名、維持会員が九十九名、普通会员が一五六名である。当初の一二〇名が約五十年の間に倍以上の数に達したのである。今昔の感を深くする。

各年度の大会参加者で、手元に資料があつて判明した分のみを一覧表（史料14）にかかげておきたい。なお、昭和四十七年度第二十回大会（北九州大学）の参加者名簿（史料12）と平成十四年度第五十回大会（九州大学）の参加者名簿（史料13）を見ると、参加者が三十年で約倍増していることがわかる。

平成四年（一九九二）五月の総会で、「入退会規定」が会則第四条に関する規定として決定された。

そして翌五年（一九九三）の総会で、会員歴二十年以上で前年度末までに満八十五歳に達した会員は、特別会員として会費の納入を免除することが決まった。この優遇措置は平成七年度の総会において、特別会員の資格を会員歴二十年以上で満七十五歳に達した会員までひろげ、かつ七十歳以上の維持会員は本人の希望により普通会員になれることも決まった。現在特別会員になっておられる十二名の方々は、九州中国学会のために指導的役割を果たされ、学会の今日の発展の基礎を築かれた方々である。特別会員の制度は、それらに対するささやかな優遇措置である。

九州中国学会は発足当初、一二〇名程度の会員で出発したが、二十年近く経過した昭和四十五年（一九七〇）には会員数は一〇〇名に減少している。学会の運営も物価の上昇により次第に窮迫し、翌年の昭和四十六年には、学会費を普通会员は四〇〇円から七〇〇円に、維持会員は一〇〇〇円から一七〇〇円に値上げせざるを得なかった。それでも学会誌を継続して発行していくのは、費用の面で苦しかったようである。昭和四十八年の第十九巻までは、会則三の「毎年一回研究発表会の開催と学会誌の刊行」はかろうじて守られてきたが、昭和四十九年（一九七四）から昭和六十三年（一九八八）までは隔年発行という変則的運営をとらざるを得なかったのである（史料14）。

## 六、運営組織の改革

九州中国学会の運営については、歴代の会長を中心に様々な工夫や努力がなされてきた。その結果、

会員数も平成六年には二〇〇名に近くなり、翌七年には二二〇名となつて学会発足当初の会員（二二〇名）の倍近くになった。学会の規模が大きくなったのである。それと従来九州中国学会の事務局は九州大学文学部に置き、中国文学・中国哲学史の両研究室の歴代助手が交替で学会事務を担当してきたが、その助手の定員が必ずしも確保できないことが大学改革が進む中で明らかになってきた。そこで九州中国学会の今後の運営について、何らかの改革が必要になってきたのである。このような動きの中で、今までの学会の機構を改革して新しい時代に対応できるものにつくり変えていくことが緊急の課題として出てきた。そして平成七年度の九州中国学会総会（福岡教育大学）において、「会長並びに役員選出の規定を定め、次年度の総会に上程すること」が決議された。その後、学会事務局を中心に改革案を作成したが、もちろん数多くの会員による意見や提案をふまえてのことである。

平成八年度の九州中国学会は川内市の鹿児島純心女子大学において五月十八日、十九日の両日に開催された。その総会において、前年来懸案であつた会長及び役員選出に関する案件が協議された結果、

- 一 会則の改正について、
- 二 役員選出規定の制定について、
- 三 会員入退会規定の改正についての三件が議決された。

従来のやり方と異なり、役員を会員の選挙によって選出するというシステムが採用されたのである。この役員選出の方法は、各県代表者会議と総会において重要な案件を決議してきた歴史的経緯をふまえて、各県代表者会議を理事会と改称し、理事十名を全会員による選挙によって選出し、選ばれた理事の互選によって会長を選出するものであつた。理事の人数は十五名で、あとの理事五名を会長委嘱

としたのは、各県及び専門分野のバランスを考えてのことであり、発足以来、各県代表者によって運営されてきた本学会の基本精神を継承発展させるものであった。総会の議決を経て、必要書類を全会員に送付して理事選挙が実施され、同年七月十一日に開票、規定により十名の理事が選出された。七月二十九日に九州大学文学部において会合がもたれ、理事による会長（理事長兼務）の互選が行われ、新会長に合山究理事が決まった。その後、会長委嘱による理事五名が決定されて役員を選出は終了した。

会長・理事以外の役員には学会報編集委員があるが、これは六名の理事が会長の委嘱を受けて兼務する。委員長は会長が務める。監査委員二名は理事会が推薦して総会の承認を受け、選挙管理委員は会長の委嘱によって選ばれる。また理事は書記・会計・名簿・会報等の仕事を役割分担する。なおこれら新しい機構についての詳細は、第三部の「九州中国学会役員一覧」、「会則」、「役員選出規定」、「会員入退会規定」及び「会員資格について」、「理事会運営内規」（史料17～22）をご参照いただきたい。

## 七、現状と課題

平成十四年に九州大学で開催された第五十回大会において九州中国学会五十年の歩みをふりかえる

シンポジウムが開かれた。そしてこの大会の総会において五十年史の編集刊行が決議された。五十年を一つの大きな節目として、過去を振りかえって、現在を確認し、未来のあり方を考えるいい機会であるように思う。

現在、九州中国学会の会員数は二六五名に達し、創立当初の一二〇名に比して二倍強の会員を擁する学会に発展してきている。構成員も創立当初の第一世代から第二世代、そして第三世代へと重層的に継承されてきた。また近年は海外からの留学生の学会参加も増加しつつある。

近年、九州中国学会の会員数が増大してきた要因の一つに大学院生会員の増加がある。その結果、学会報の投稿と大会発表の人数のバランスが従来に比して崩れている傾向が見られる。そのことは若手研究者が増加して学会自体の将来にとって喜ばしいことであることにはちがいない。しかしながら、それは同時に逆に中堅クラスの投稿や研究発表が減少の傾向にあることを物語ってモいる。そこに時代の推移を感じるけれども、そのことは学会の水準を保つていくためにも今後、解決すべき課題でもある。その対策として平成十年（一九九八）の『九州中国学会報』第三十六巻より「依頼論文」一本文を掲載するようになった。大会発表については、最近では中堅クラスの会員に任意に依頼してきたいきさつもある。しかし今後は「依頼論文」と「依頼発表」について、継続的に維持していくためには日本中国学会の例にならってそれらを制度化して、一年前から「論文」と「発表」を依頼しておくことを考える時期にきているように思う。

また次の課題としては、会員数の増加にともない、応募論文数も年々増えてきており、学会報の掲

載論文数をふやすことを検討すべき時期に來ていることである。

近年諸物価の高騰につれて印刷費用も影響を受けており、学会報の掲載論文数をふやすことになれば、学会会計の逼迫は目に見えてくる。会員数が今のままで推移していくと考えると、近い将来において会費値上げの問題が出てこざるをえない。会員全体で真剣に考えて解決しなければならぬ課題であろう。

次に「学会報」掲載論文の内容に関して、創刊号以來「中国文学・語学」と「中国哲学・文化」とに分けて見てみると、大体、若干の異同はあつても平成七年（一九九五）の第三十三卷まではほぼ均衡を保つてきたが、平成八年（一九九六）の第三十四卷では「中国文学・語学」四本（論文）に対して「中国哲学・文化」一本となつて、そのバランスは大きく崩れはじめ、以後八年間をみてみると、「中国文学・語学」と「中国哲学・文化」との割合がほぼ二対一となつている。このことも今後実情を分析して考慮すべき課題であろう。

九州中国学会発足当初から、すでに五十年が経過してきた。その間に大学・短大・高専の数も増加し、また各大学に大学院も設置されて各機関に機関誌や紀要等も多く存在し、學術活動も多様に展開するようになった。

しかしながら本学会は今後とも九州・沖縄地区全体の学会であり、また親睦をかねた學術的な集まりとして發展していくべき使命をもっているように思う。

第二部  
回  
想

## 九州中国学会と私の思い出

平 岡 禎 吉

私は昨年で満九十三歳になりました。三年前から日本中国学会の会費免除会員となり、平成十年十月、学会創立五十周年記念の論文集に論文を提出以来、学会に無縁の人間となったつもりのところ、突然旧友の九州中国学会前会長、福田殖教授から通信を頂いた。用件は九州各県の漢文研究会が統合されて、九州中国学会となった初期の事情を知りたいから何か書いてくれとのことだった。この頃は時々老化を感じたので固辞するつもりだったが、折角の依頼だからと、アルバムなどを材料に書いてみることにしたが、誤りも多いだろうが御容赦願いたい。

第一回九州中国学会は、昭和二十八年五月二十三・二十四日に大分大学で開催されたが、その会の前に九州大学で開かれた各県代表の会で、次のような各県の世話人が決まったようです。福岡県はさすが九州大学の地元だけに、文学部哲学科に楠本正継教授、山室三良教授、文学科に目加田誠教授、教養部に岡田武彦教授、福岡学芸大学に真武直教授、更に若い学者者に佐藤仁君や小西昇君など、多彩な人材が揃っていて堂々たる陣容だった。大分県は田口正治教授（後の学部長）、工藤豊彦教授、

宮崎県は黒江一郎教授、熊本県は津下正章教授、長崎県は井上源吾教授、佐賀県は藤田秀雄教授、江頭廣教授となっていて、会長は無論楠本教授だった。

九州中国学会は、昭和二十八年五月二十三・二十四日大分大学で第一回を開催し、第二回は昭和二十九年、福岡学芸大学、第三回は昭和三十年鹿児島大学、第四回は昭和三十一年九州大学で開催された。学会報は第三回まで私が編集人となったが、当時は手書きの謄写版刷りだった。昭和三十一年、第四回大会が九州大学で開催された時、事務局も九州大学に移り、ようやく活字印刷の学会報となった。私が編集した頃の学会費や会計のことは今明らかでない。

昭和三十年五月二十八・二十九日の鹿児島大会には、東京大学の宇野・塩谷の両元老、東京教育大学の内野熊一郎教授という、学会の著名のお三方が御出席になり、実に盛大な会であった。塩谷先生から君の所で漢文教育の会を開くようにと長文の依頼書や、宇野先生から御丁寧な礼状を頂いたりして恐縮したものだ。それにしても私のような若僧の所にこのような大先生をお迎え出来たのはどうしたわけか。今考えてみると、恐らくは私が学位を請求した時の主査であられた内野熊一郎先生のお力添えだろうと思う。内野教授は九州大学での大会にも御出席された。その頃、私は京都大学の吉川幸次郎・平岡武夫の両先生とも交わりがあり、私の一番楽しい時期であった。

日本中国学会は、昭和二十四年十月創立となっているが、その一月に中国文学・語学・哲学に対する国の科学研究費補助にかかわる配分審査の必要から、その母体となる学術団体が統合されたのである。その中に東京支那学会などと共に、九州の中国学関係者なども含まれて研究者が糾合されたが、

その研究者はすべて個人による参加であった。

九州中国学会はその後、昭和三十二年熊本女子大学で開かれた。

(二〇〇〇、三)

## 草創期の九州中国学会

上 尾 龍 介

九州中国学会の草創期のことを何か書いてくれぬか、という編集部からの便りをいただいたのは二月の上旬のことであった。

だが思ってみれば中国文学から出発しながら、次第に留學生教育を通じて、国際交流、比較文化の方向に関心が移り、その分野で仕事を重ねて来た僕が、中国学会の昔を語るのも妙なものだと思っはみたが、「草創期のことを知る人が、文学の方面では殆ど居なくなってしまったので」と言われてみて、今更のように時の流れを感じたようなことであった。

熊本大学に行つた小西昇君や西南学院大学の樋口進氏などと一緒に僕等が卒業したのは昭和二十八年のことであつたが、この年は旧制大学の最後の卒業生と新制大学の最初の卒業生とが同時に卒業することになつたという教育史上の節目の年でもあつた。

この年に、第一回の九州中国学会の研究発表会が開かれたように思うが、このことと、学制が改革されて各地に設置された新制大学が、記念すべき最初の卒業生を送り出すことになつたこととの間には、何がしかの相関関係があつたのではないかと想像される。敗戦の廢墟の中に産声を上げた国・公・私立の若い大学が一斉に完成年度を迎えるという新しい日本人文の夜明けの年でもあつたのだから。完成年度、などという耳慣れぬ言葉は、一つの大学が創立されて、始めての卒業生を送り出す年のことで、定年後に新設の私立大学に移り、この言葉を僕は始めて耳にした。

昭和二十八年の第一回の学会は大分大学で開かれたが、当時の大分大学には田口正治教授と少壮の工藤豊彦教授が御在勤であつたが、この一年か二年か前に、工藤先生は楠本正継先生のもとに研究にお見えになっており、昔の正門（赤門）前の旧法文本館の二階にあつた中国学の研究室で、時おり、何やら漢籍を探して居られる工藤先生をお見かけしたものであつた。

当時は文学部に目加田誠先生、中国語の影山巍先生。新設されて日の浅い教養部に濱一衛先生、那須清先生が居られた。上海の東亜同文書院の高名な教授であつた影山先生が最も年長で、「日本芸能の源流」の名著で知られる濱先生はまだ四十代で、あの頃五十歳になられたばかりの目加田先生に較べると、なお若年の感があつて、学生と身近であつた。玲瓏たる北京語を、まるで北京人のように話

される那須先生に至っては、京都の倉石研究室から赴任して来られたばかりの、まだ三十を幾らも出ていない新進の助手であった。

このように九大の中国文学は若々しい空気に包まれていたが、少壮の目加田先生は当時既に高名な存在であつて、ソ連邦の学者がロシア語で書いた詩経研究の自著を持って先生を訪れたのは、それから何年も経つてはいない頃であつた。

第一回の学会の帰途、多少安堵の気分のため大分からの列車の中で、

「妙な話をする人が居ましたね」

と言われた目加田先生のさり気ない言葉と、その時の雰囲気とが、どういうわけか、六十年近くも経つた今になつても思い出される。恐らく、肅然とした思いがその日の僕たちを打つたのかも知れなかつた。第一回の学会については、ほかに何も覚えていない。

翌昭和二十九年の第二回の学会は福岡学芸大学で開かれた。現在宗像の方に移転している福岡教育大は当時福岡市内の大橋に在つて、福岡学芸大学という名称であつた。のちの九州芸術工科大学の校地である。その後、この大学は九大と合体して芸術工学部となつた。校地は同じ場所である。

この第二回の学会の時に、九大中文からも研究発表をすることになり、小西、樋口の両君と僕まで入れて、三人の共同研究の形で中国の現代文学についての話をした。標題は忘れたが、時間を多く配分して貰つたような気もするが確かでない。

記憶に残っていることは、東洋史の日野開三郎先生とその門下の諸氏が演壇の近くにずらりと顔を

並べていたことであつた。それは後年中央大学に行つた先輩の船木一馬さんや、北大に行つた菊池英夫君、宮崎大に行つた山内正博君、熊大に行つた草野靖君たちであつたが、後日、日野先生と廊下で顔を合わせた時、

「やあ、先日は中文の『レビュー』でしたな」

と言つて、四角ないかつい顔を崩して一笑された。

その頃中文では「中国文芸座談会」を組織して、かなり、頻繁に研究会を開き、それぞれの成果を発表しては討論し合つていたのだが、「それを学会に出して見ては」という目加田先生のすすめで、共同研究の形で持ち出したのであつた。

中国文芸座談会の名称は毛沢東の「延安文芸座談会」から取つたもので、この命名は僕の記憶では小西君の発案ではなかつたかと思う。それと同時に、発表したものを記録に残していったがよい、という先生の助言で雑誌を発刊することになり、名称を「中国文芸座談会ノート」ということにしてスタートを切つた。現在の『中国文学論集』の先駆となつた雑誌である。

この学術誌らしくない名称は、昔、東大の中国文学（漢文学）の卒業生の人々、それは松枝茂夫、小野忍、竹内好、飯塚朗、武田泰淳、目加田誠などの錚錚たるメンバーだったのだが、その人々が出した雑誌の、その名称の柔軟さを意識したものであつた。僕たちの或る者は武田泰淳に憧れたし、或る者は竹内好を、また小野忍を、そして或る者は目加田誠を、松枝茂夫を強く意識していた。

今にして思えば、若い目加田教授を圍んでの、それは九大中文の青春の時期であつたし、それは初

期の九州中国学会の根底をしかと支える、地下の熱いマグマでもあったように思う。

体を痛めて療養生活の中に居た秋吉勝広（久紀夫）君が活動を始める時期は、これより少し後になる。

思い出すままに書いてみると、それは九大中文の回想記のようになってしまい、編集者の意図からかけ離れたものになってしまったけれども、当時の駆け出しの僕の頭の中は、自分のことで一杯であつて、ほかのことはまるで記憶に残っていないのである。当時の中文の諸先生方が御存命であれば、幅のある奥行き深い記録が残されたに違いないと思うのだが、これは望んでも詮ないこと。

僕にいつまでも残る未熟さが、学会の諸賢の失笑を買うような回想記を書かせてしまったであろうことを恐れるばかりである。

（二〇〇四、三）

## 九州中国学会と恩師の方々

大 塚 博 久

さきごろ畏友の学会会長岩佐昌暉先生から「九州中国学会五十年史」を発行する、については何か思  
い出など書くようにとのお手紙を頂いた。実のところ、私はこの学会には一九九二年長崎大学主催で  
行われた第四〇回大会に参加したことがあるだけで、書く程の持ち合わせがない。だが同封されてき  
た資料「九州中国学会報」第三十八、三十九、四〇巻(抜刷)に書かれた福田殖先生の文章を拝見  
していると、私の師事した恩師の名前が出てくる。そこで、これらの資料を手引きとし、すでに物故  
された先生方を偲びながら、責任の一端を果たしたいと思う。

私が日本中国学会の一員となったのは、一九五九年(昭和三四)十月九州大学で開催された第十一  
回学術大会に山口大学の石黒俊逸先生のお伴をして参加してからである。石黒先生は戦前より先秦の  
思想を研究し、一九四三年には東洋思想叢書の一として日本評論社より『荀子』を出版されており、  
戦後は引き続きこの領域の研究を続けられる一方、新中国における思想動向に注目して徐々に近代思想  
の領域にも手を染められつつあった。そのひとつがこの大会での「現代中国における現実重視の傾向」

と題する発表である。先生は謹直重厚一見近寄り難い風貌ながら談論を好まれ、この時の車中談では、先生がしばしば九州の学会にお出掛けになり、九州各大学の研究状況にもお詳しいこと、九州大学の目加田誠先生とは前記「叢書」の同じ執筆者としてかねて昵懇の間柄であることなどを知った。また日本中国学会の創設にも関わり最初の中国・四国地区選出の評議員を務め、第一回学術大会では「周国の成立と天命思想」を発表した、とも伺った。

資料によれば、早くも一九四七年（昭和二二）には九州大学での学会活動が開始されており、石黒先生はこの年五月二十五日の会で「王靜安釋禮補遺」を発表（「九州中国学会報」第四十卷所収、福田殖「九州中国学会の歩み（その三）」の表一による）、同学会の一九五一年（昭和二六）六月十七日開催の大会では「孔子の政治説」（同前第三十九卷、福田殖「歩み（その二）」の記述および表一による）を発表されている。

この同じ日の学会には山口大学の湯淺幸孫先生の「支那思想に於ける人倫的なるものと超越的なるもの」と題する発表が記されている。先生はこの前年の一九五〇年に山口大学に着任されたばかりで、両先生打ち揃つての参加であった。先生は一九六一年（昭三六）京都大学へ転出され、八〇年停年退官、二〇〇三年二月郷里岡山市で逝去された。生前の業績は学界周知のところであるが、この日の研究発表は、「規範意識の東洋的形態 道德意識に就いての覚書」として「山口大学文学会志」第二卷第一号及び第二号（一九五一年二月・十一月）に結実している。いまこの論文は著書『中国倫理想の研究』（同朋舎出版、一九八二年三月刊）に収められている。

前記資料「歩み(その二)」の表三 および「歩み(その三)」の写真などを見ると、正式に「九州中国学会」として発足した一九五三年の大分大学での第一回大会では石黒先生の研究発表「史記孟子荀卿列傳の構成」があり、福岡学芸大学における第二回大会(一九五四年)には石黒、湯淺両先生参加、九州大学における第四回大会(一九五六年)に石黒先生、長崎大学での第八回大会(一九六〇年)に石黒先生の参加が確認できる。石黒先生は一九六一年(昭和三六)十一月惜しくも早逝されたが、生前は殆どの学会にお出になったようで、余程この学会に親近されるところがあつたと推測される。

青木正児先生が鹿児島大学に行かれ、自分が随行したことがあると当時山口大学の助手であつた横山永三教授から聞いた記憶があるが、一九五五年の第三回大会のことであつたのだろうか。青木先生は一九五七年三月山口大学を退官され、自宅のある京都市へお帰りになつたが、その翌年の五八年四月にはお弟子の岩城秀夫先生が着任された。先生の顔が第一三回大会(一九六五年、西南学院大学)の記念写真に見出される。第二十四回大会(一九七六年、福岡教育大学)では「温州雜劇は幻の演劇か」を発表されている。

石黒俊逸先生が逝去された年、たまたま私は九大教育学部で第一回集団力学研究員として研修中で、余暇を利用して当時院生だつた友人の林田愼之助先生を研究室に訪ねるうちに、助手の小西昇先生、正田啓佑先生とも親炙するようになったばかりでなく、目加田先生からも親しくお声をかけて頂くようになった。恩師の急逝で孤児同然となつた私を不憫に思われてか、先生は「中国文芸座談会」(一

九六二年二月）での研究発表をお許し下さったのである。その後も折に觸れて御指導を賜った。

一九六三年（昭和三八）秋、中国科学院のメンバーを主とする中国学術代表团が日本の関係研究諸団体、友好組織の熱烈な招請に応じて来日することとなった。一九五五年（昭和三〇）の郭沫若学術使節団来日より八年振りであつて、これに寄せる期待も大きく、山口大学でも早くから学術交流を希望する旨を表明して地区歓迎実行委員会を組織し準備に當つていたところ、中央の招請委員会が決定した日程に山口は無かつた。代表団の来日が予定より遅延したことも一因、その他諸々のこともあつてのことだつたが、到底納得できるものではなく、事務局を担当していた私は、招請委に再三日程の変更を要請したが拒絶され万策尽きた時、九州地区代表の目加田先生に事情を訴え、福岡での日程を一日譲つて頂けないかと哀願した。まことに強引なお願ひであつた。先生は東京出張の帰途山口に立ち寄り実情を聞こうとおっしゃり、十月二十六日早朝宇部駅經由山口市に來られ、実行委員長の経済学部長上妻隆栄先生に会われた結果、日程の割愛を承諾された。当日は第十八回国体秋季大会が山口県で開かれるに際し、天皇、皇后両陛下がお召し列車で小郡駅到着、山口入りされるとあつて、小郡山口間は交通規制下にあり、先生は迂回して防府駅より帰福される仕儀となつた。そのお蔭をもつて、十一月二十七日夜羽田に到着した代表团は、東京、仙台、京都、広島を経て十二月二十二日來山、同日午後から二十三日午後まで歓迎集会および六分科会に分かれての学術交流行事を終え、福岡市へ向かつた。この行事実現は偏えに目加田誠先生の温情と決断によつてもたらされたものである。

ちなみに中国学術代表团のメンバーは次の通りであつた。

副団長 江隆基（教育学）蘭州大学校長

〃 侯外廬（歴史学）中国科学院歴史研究所副所長

団員 游国恩（文学）北京大学教授

〃 夏 鼐（考古学）中国科学院考古研究所所长

〃 劉大年（近代史）中国科学院近代史研究所副所長

〃 王守武（物理学）中国科学院半导体研究所副所長

〃 顧震潮（気象）中国科学院物理研究所研究員

〃 李格非（言語）武漢大学助教授

他、団秘書 徐鶴皋、通訳 周斌

なお団長の張友漁氏（法学・中国科学院哲学社会科学部副主任兼法学研究所所长）は病気のため東京に残留、西下されなかつた。

十二月二十三日夜、代表団を迎えた九州大学では、療養中の名誉教授楠本正継先生が逝去されるといふ悲痛な事態が発生し、行事と重なつて大変だつたと聞き及んでいる。なんら支障のない日中學術交流の現在からすると誠に今昔の感にたえない。

私は一九七六年（昭和五一）九月より九州大学中国哲学史研究室に内地研究員として半年間、荒木見悟先生、町田三郎先生のお世話になつた。最初は相当の覚悟で研究生生活を送る積りであつたが生来怠惰な性格が悪いしてすぐ遊学生生活となり、熱心に御指導下さつた先生には今もって申訳なく思つて

いるが、謹厳な学風で知られる荒木先生のもとで、あのような人間でも過ごせると思われたか、思われなかったか、ともあれその後菰口治先生、海老田輝巳先生、藪敏也先生らが次々と入室され、着実に成果を挙げられたことはご同慶の至りである。

福田殖先生をはじめ、邊土名朝邦先生、野口善敬先生、柴田篤先生、難波征男先生、当時の院生、学生諸氏とは今もつて交流があり、各位はいずれも現在「九州中国学会」の有力会員として活躍されており、その意味で私もこの学会と断ち難い縁で結ばれていると思うのである。

(二〇〇四、二)

## 九州中国学会草創期の研究者の動向

秋 吉 久紀夫

今日は、わたしに九州中国学会の草創期の頃の話をとのことですが、もはや半世紀も過ぎていて、

あまり記憶はさだかではないのですが、この機会をかりて、努めて当時の研究者たちの動向を把握できればと願っています。

だがそれには、どうしても当時の九州大学での中国学の研究状態に触れないことには、具体的な内容は明らかにならないので、予めご容赦ください。わたしが九州大学文学部に入学したのは、敗戦後四年を経た一九四九年です。ちょうど法文学部が法学部、経済学部、文学部に分離した年で、二ヶ月後には六・三制の学制改革で新制大学が全国一斉に発足します。当時、中国学関係学会つまり東洋史、中国哲学、中国文学専攻研究室は、旧法文系校舎の二階の東南の角にあつて、三つの専攻が同じ部屋に共存していました。入学早々の四月二八日。確か同じ二階にある第七教室で、第四回九州大学中国学会が開催されました。

恐る恐る出席したわたしの前で、発表された方と表題は、荒木見悟先生の「事と理の問題」と鈴木喜一氏の「支那学研究法について」でした。出席していた学生は、東洋史の菊池英夫氏と中国哲学の瀬戸口拓雄氏と中国文学のわたしという僅か三名の新入生ばかりでした。いまでも、その時の会場の「支那」という言葉の是非をめぐる鋭い応酬が、甲高く聞こえて来るようです。

九州中国学会の前身を遡れば、九州大学ですでに始まっていたこの中国学会です。調べてみますと、その第一回は一九四七年五月です。発表者の石黒俊逸先生は当時旧制山口高等学校、池田末利先生は広島文理科大学、竹内照夫先生は熊本第五高等学校に在籍でした。つまり学会は福岡市近郊だけでなく、岡山の第八高等学校の林秀一先生も参加されていたから、東は岡山から西は鹿児島までの広範

困な西日本地区の中国学会だった訳です。

わたしが始めて覗いたこの九州大学中国学会の開催された一九四九年は、実は十月一日に中華人民共和国が成立し、同月の二二日に、東京の学士院会館で日本中国学会が、期を一にして産声をあげた年でもありました。

やがて新制大学の二年間の教養課程を終えた学生が専門課程に進学した一九五一年から、日本各地、各大学で新たな学会や研究会が、続々と発足しはじめると、中国学関係の分野でも同様な現象が現われます。一月に九州大学中国学会と共催で西日本中国語文学会が、五月に現代中国学会が東京で発足し、同じ五月に、九州大学文学部中国文学専攻に、中国文芸座談会がスタートし、月々開催するとう状況を呈します。

このような状況のなかで、第一回九州中国学会が、一九五三年五月、大分大学学芸学部で開催されたのです。推進役は日本中国学会の創立メンバーの一員である九州大学の楠本正継先生や目加田誠先生が当たられ、構成員は九州大学中国学会を基盤とした九州各県の発足したばかりの新制大学の中国学研究者であったことはいまでもありません。

初期の九州中国学会で、わたしの記憶に残る発表者を挙げると、『九州中国学会報』創刊号（一九五五）冒頭で、「人間の思想は決して孤立して存在し得るものではない。…接触によって生ずる矛盾撞着に即して常山の蛇のように躍動しつゝ成長する生命としてそれを見なくてはならない」と、『斉物論』という篇名に因みて」で、莊子を引用されている楠本正継先生を初め、すでに敗戦直後の一九

四七年、焦土と化しまつた劣悪な出版事情の最中の福岡で、『風雅集』を公にされた目加田誠先生、また「易の繫辭伝研究」で刮目されていた山下静雄、それに「日中比較言語」の真武直、「淮南子研究」の平岡禎吉、「王陽明学派論」の岡田武彦、「三浦梅園研究」の田口正治、「中国演劇史研究」の浜一衛、「中国詩賦論」の中島千秋、「白氏文集研究」の岡村繁などの諸先生方が思い出されます。

なかでも、わたしが注目していた少壮研究者は、前述のわたしが入学早々に出席した九州大学中国学会での発表者荒木見悟先生です。先生は九州中国学会発足時以前に、すでに『日本中国学会報』第一集（一九五〇）、第二集（一九五一）に所論を発表されていたが、やがて結実する論著『仏教と儒教 中国思想を形成するもの』（一九六三）は当時はやくも、ほぼ論郭が明確化されていたのではと思われます。この強靱な探究心はいつたい何処に根差すのかと思案していたのですが、やっと片鱗らしきものを捕捉しました。日本の敗戦直後の一九四六年六月、長崎から福岡に戻られた頃に執筆された「宗門における絶対性の回復」（『人文』第一巻第二号）によつてです。

「宗門は国家的権威や帝王的威嚴の埒外にあるべきである。それは中世に於て天台座主やローマ法王が演じた如き専擅的行為をなすべき余地を保たんが為でなく、宗教の具有する絶対性の本質よりして、当然そうあらねばならないのである」（昭五八、九 葦書房刊『釈迦堂への道』一四五頁）という箇所です。

今述べた方々は、いわば草創期の九州中国学会を担った研究者群です。いずれも戦後でなく戦争期に中国学の世界に足を踏み入れられていた方々です。だからこそわたしは考えます。敗戦と同時に今

後の自己自身の研究の在り方を、きつと身も細るような思いで凝視されたにちがいないと。

次がそれらの方々とは異なり、敗戦後にこの戦禍に燻る中国学の領域へ、なりふり構わず身を投げ入れた研究者たちです。かれらは戦争期には、みな大日本帝国の防人として、中国大陆はむろん世界各地の赤く塗りつぶされた日本占領地区で、特攻隊など過酷な兵役に従軍し、敗戦後は虜囚となつてシベリヤで強制労働させられ死から蘇つた若者たち、または国内にいても「緊急学徒勤労動員法」によつて奉仕という名目で、完全に学業を放棄させられ強制的に軍需工場で、最底辺の肉体労働に従事させられていた若者たちです。かれらが九州中国学会のいわば第二世代です。

前述したわたしも三名に中田喜勝氏と、翌一九五〇年四月、九州大学に入学した山内正博、隈本宏、樋口進、上尾龍介、諸井耕二の諸氏と、一九五一年四月に専門課程に進学した小西昇、佐藤仁両氏らです。かれらの中から中国文芸座談会は誕生したのです。中国哲学専攻の佐藤仁、隈本宏両氏も第八回のこの座談会で発表され、その輪は回を重ねる毎に、周辺の大学をも巻き込んで行きました。時期は一九五〇年六月の朝鮮戦争の勃発、五一年九月の対日平和条約と日米安全保障条約の調印、翌年のそれに徹底的に抵抗する血のメーデー事件、五二年七月の破壊活動防止法案の成立、さらに下つて五七年六月の中国での反右派闘争開始、六四年八月のアメリカのベトナム戦争参加、六六年八月の文化大革命へと続くまさに混沌とした時代でした。

現在少し赤茶けた手持ちの『中国文芸座談会ノート』を捲つてみますと、中国文芸座談会は一九六六年十月までで一〇〇回を記録していますが、目加田誠先生は創刊号（一九五四・九）の「創刊によ

せて」で、「中国文学の與へるものは、我々にとって正しく今日の問題であり、我々を自棄絶望から救ふ力づけであり、先ず吾々自身を改造させる何者かがそこにある」と力説されています。

これら第二世代に共通するものは、やがて古典へ研究対象を移行するひとびとをも含めて、当初の研究領域は殆どみな近代中国文学でした。中でも、とりわけ熱気に溢れていたのが、わたしより十歳年長の樋口進氏と六歳上の小西氏であることは、どなたも異存はないはずです。かれらの体からは敗戦時の挫折した精神の切断面が、まるで赤々と燃え盛っているようでした。特に樋口進氏とは、一九五三年、第一回九州中国学会が創立した年、目加田先生から知らされて共に創立早々の現代中国学会に加入し、一九六二年には西日本現代中国学会の組織化に参加、後に共同で「近代中国文学の課題」研究に取り組んだ仲で、わたしはじかに感じ取っていました。

当時の火を噴く樋口進氏の思考は、同じく先の『中国文芸座談会ノート』創刊号所載の趙樹理の小説『李家荘の変遷』に関する論文「鉄鎖が太原の満州墳で小常に遇うことについて」にある「積極的に社会改革に投ずるに至る人物形成に欠くべからざる第一条件は、先ず自己の存在するその社会を認識することである」に、奇しくも彷彿していると考えます。また小西昇氏の意識は『中国文芸座談会ノート』第六号（一九五五、六）掲載の論文「初期の矛盾 その一」の「革命という理想の中心を見失った彼が、その失敗の跡に見出したものは、現実の自分とそれをとり巻く現実の社会、時代であった」に要約され、やがて、これが『九州中国学会報』第四卷（一九五八）の「短簫鏢歌についての試論」を発端とする漢代楽府詩研究への道行きを、予想するものであったのだと、わたしは考えていま

す。

わたしの最初の研究発表は、一九五三年四月の第十二回文芸座談会でした。長年からだを痛め、やつと「生きる」意味を臆気ながら自覚して復学した時期で、五月には第一回九州中国学会が大分大学であることが決まっていた頃です。場所は三畏閣の二階の奥の間。表題は「艾青の郷愁」です。艾青はわたしを中国学へのめり込ませた誘惑者です。わたしは敗戦という歴史の狭間から、たまたま流入して来たかれの詩に魂を奪われたのです。こんな素晴らしい作品があるのを知らなかった、あるいは故意に知らされなかったことが、つまるところ日本の敗退の原因だったと直感したのです。以上九州中国学会の草創期の頃の研究者の動向について述べましたが、わたしにとって、この学会は学会という意味において自と他を同時に変革させる運動の場だったことに変わりはありません。

(二〇〇二、五、七)

## 九州中国学会五〇年の歩み（昭和三〇、四〇年代を中心に）

疋 田 啓 佑

昭和三〇年代の中国の思想界は、三一年（一九五六）の百花斉放・百家争鳴運動で、大学の教師をはじめとする知識人たちが、自分の考え方や意見をいろいろな形で発言することを求められ、それに応じて多くの人が発言したのはいいが、それも束の間、翌年には反右派闘争が始まり、自由な発言で政府を批判した人々は逮捕され、弾圧された。この一九五七年の反右派闘争の後、翌年からは大躍進運動（三面紅旗・人民公社・総路線）が始まり、雑誌『人民中国』は、共産主義の理想に向かって躍進する新しい中国の姿を大々的に宣伝し、日本の進歩的知識人・文化人と言われる人々は賛同し、称賛していたのである。従って日本においても、大学で中国に関係する文学や思想を学んだ私たちは、大なり小なり中国の政治に影響されていた。

当時、中国語を学ぶときに使った辞典は、井上翠の『中国語新辞典』（江南書院）であり、テキストも江南書院の中国語訳注双書を使った。古典を読む方では、簡野道明の『字源』、塩谷温の『新字鑑』、小柳司気太の『漢和大辞典』、中国の『辞源』や『辞海』などを引いていたが、諸橋轍次の『大

漢和辞典』が昭和三〇年から刊行されはじめ、三五年に完結した。この後は、専らこれに頼るようになったが、大学出の初任給（公務員）が一万一千八百円という時に、一巻が五千円という値段で、その上、全十三巻もあり、これを購入すると大変で、大抵の学生は、大学の研究室か図書館を利用した。この三十五年は、俗に言う六〇年安保騒動の年（日米安全保障条約改定の年）で、この年には鐘ヶ江信光の『中国語辞典』（大学書林）が新しい言葉を取り入れて刊行され、中国語を学ぶ人を喜ばせた。なお『日漢辞典』（大安刊行）はこの前年に出ているが、これは商務印書館本の復刻版である。

昭和三五年（一九六〇）、私は九州中国学会の会員となったが、その時の『九州中国学会報』は第六巻で、ザラ紙にタイプ印刷（栄光印刷）であった。当時、九州中国学会報の事務は、九州大学の中国哲学・文学の研究室が担当していたので、印刷の校正は大変であった。というのは、当時のタイプ印刷は、鉄筆で油脂をヤスリの上でカリカリ言わせながら切るガリ版による謄写印刷よりはましであったが、厚い特殊な油紙をタイプで叩くことで、圧迫されたところがインクを通すことによる印刷のため、その校正は、印刷屋で原紙を透かして見たりするので大変であった。この年の学会の開催は、長崎大学が担当校で、次年度は福岡地区の大学が開催を担当するというように、福岡地区の大学と、福岡県以外の九州地区の大学が交互に開催することになっていた（文末の表を参照）。

当時の学会の主だった人は、大学の中国哲学、中国文学関係の教員であったが、その多くは旧制の師範学校や旧制の高等学校の漢文関係の教育に携わった人であったので、大学での中国関係の教員は

少なくはなかった。ただ今日と違って、まだ日中国交が回復していなかったので、中国語の教員や中国語の専攻また履修者は少なかった。例えば九州大学における中国語の履修者は、初級二クラスにそれぞれ十数人の受講者であり、中級になると、十人以下の受講者であって、大半の学生は、ドイツ語かフランス語をとり、ドイツ語やフランス語の十分の一以下の数であった。筆者とて、中国語は第三外国語として履修しているような状況であった。

昭和三八年、中国から学術代表団が九州大学を訪れた。メンバーは哲学系は『中国思想通史』の外廬、文学系は『楚辞研究』の游国恩、史学系は『中国考古学研究』の夏鼐の三教授で、新中国における学術研究が披露され、工学部本館の大会議室で学術交換が行われたが、戦後の九州における日中学术交流の開幕であり、学問的刺激として大きなものがあつた。そしてその会議が行われている一方で九州中国学会初代会長の楠本正継九州大学名誉教授が亡くなられた。

当時、『九州中国学会報』を支える会員は、約一二〇名、その内、半数が大学、短大の関係者で、あとの半数（六〇余名）は高校の先生であつた（文末の表を参照）。会員数が少ないため、財政状況は苦しく、会報の出版費を捻出するのに大変な困難さがあつた。今日のような印刷事情とは異なり、本を出版するというのは、それがたとえ半紙のような紙で綴じた雑誌であろうと、月給に比して高く、贅沢なものであつた。そのため維持会員の制度を作り、大学、短大の職にある人や、当時開校しはじめた高専の専任講師以上の人になってもらうことになり、約三〇名の人があつた。昭和三〇年代は、論文の投稿者に高校の教員からのものが二、三篇はあつたが、大学や短大が増加してくるに

つれ、その方の会員が増え、また高校から高専や短大、大学等へ移る人もあったが、四〇年代に入ると高校の教員の会員の数は五〇名と少しずつ減少していき、四五年には三〇余名となっていた（文末の表を参照）。

昭和四一年から、学会報の印刷は日昇プリント社に移ったが、おなじB5版のタイプ印刷であった。この四一年に、中国では「文化大革命」が発動され、旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣を一新するという運動が叫ばれたため、中国の古典研究は政治に翻弄され、それが日本にも大きく影響した。当時、中国の状況を知るための書籍を輸入する書店として、福岡にも「大安」書店と「極東書店」の支店があり、それぞれ『大安』、『書報』という冊子で、中国での出版書を宣伝し、販売していた。特に大安は『中日大辞典』（愛知大学編纂処編）を四三年に刊行して中国語学に貢献している。

中国で文化大革命が継続している中、日本ばかりでなく、パリのカルテラタンで起こった大学区紛争が日本にまで及び、それが七〇年安保騒動へ繋がっていったが、その頃が、会員数が最も減った時期で、約百名というところまで落ち込んでいる。そして中国では、林彪がクーデターに失敗して飛行機とともに墜落死した。その翌年の昭和四七年（一九七二）に日中国交が回復して、中国に対する研究に明るさをもたらされたものの、翌年には「批林批孔運動」が発動され、孔子に対するばかりでなく、儒教など伝統思想への批判から、排斥へと風当たりが強く、それがまた日本にまで及んで来ていた。

『学会報』は、四六年の第一七巻からA5版の活字オフセット印刷になって、紙質も向上したが、

財政的には苦しく、四八年の第十九巻から隔年の刊行になり、十六年後の平成元年まで続いた。そして日中国交回復後、昭和五一年（一九七六）には、毛沢東が死去し、四人組が追放され、文革の終結が宣言されるとともに、中国は改革開放政策をとり、中国からの留学生が増加し、学会員も再び増加しはじめ、百二十名を越えるようになった。それとともに日本も経済的に発展し、学会に中国人の学者を招待して講演をするような力を備えるようになり、昭和五八年（一九八三）には、学会員も百五十名を越えるようになり、学会報も今日のスタイルとなり、それなりの充実が図られ、紙面にも中国人留学生の論文が掲載され、九州中国学会も多彩な顔ぶれと、内容を持つに至った。

「学会報」の内容及び会員の変遷表

42	41	40	39	38	37	36	35	昭和
(1967)	(1966)	(1965)	(1964)	(1963)	(1962)	(1961)	(1960)	(西紀)
13	12	11	10	9	8	7	6	巻数
8	8	8	9	7	8	10	10	篇数
2	4	4	4	2	5	4	4	哲学
3	3	3	2	3	0	4	2	文学
1	1	1	2	1	2	0	2	語学
2	0	0	1	1	1	2	2	日本他
0	2	3	1	0	3	2	2	高校教員
1 1 3	1 0 7	1 2 4	1 2 0	1 1 9	1 1 8			会員数
51	51	68	64	62	63			高校教員他数
九州大学	鹿児島大学	西南学院大	宮崎大学	福岡学芸大	佐賀大学	九州大学	長崎大学	大会開催校

(七) 10011、10015

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43
(1985)	(1984)	(1983)	(1982)	(1981)	(1980)	(1979)	(1978)	(1977)	(1976)	(1975)	(1974)	(1973)	(1972)	(1971)	(1970)	(1969)	(1968)
25		24		23		22		21		20		19	18	17	16	15	14
5		6		6		6		6		8		6	6	7	6	6	6
3		3		3		2		2		4		3	3	2	2	2	2
2		3		3		2		2		3		1	1	1	1	1	2
0		0		0		1		1		0		1	1	2	1	1	1
0		0		0		1		1		1		1	1	2	2	2	1
0		0		0		1		1		0		1	0	2	0	2	1
160		152		149		134		127		126		111	107	108	100	113	112
33		32		39		37		37		38		38	38	38	36	49	49
大分大学	西南学院大	琉球大学	福岡大学	佐賀女短大	九州大学	熊本大学	福岡女子大	鹿児島大学	福岡教育大	都城高専	九州大学	佐賀大学	北九州大学	久留米高専	長崎造船大	福岡教育大	大分大学

## 「九州中国学会」開催校を三度して

永 末 嘉 孝

(一度め)

昭和四十五年度

五月三十一日(日)

於 長崎造船大学

原稿〆切三日前、やっと目当ての資料の一部分を探しだした。それはガリ刷りB4版、六枚の「昭和四十五年度、九州中国学会、プログラム、発表要旨、諸御案内」である。

この、今でいう「大会要項」の制作者は当時の同僚であった川北泰彦氏(元奈良教育大)である。ガリ切り、刷りの技巧たるや、まさにプロ級である。

さて、開催校の長崎造船大学とは、いささか宣伝めいて申し訳ないが、現長崎総合科学大学の前身である。全学二千名余の小粒の私立大学ではあったが、発展のまっ最中であつた。九州中国学会開催について「地方の小さな私立大学で開催させてもらえるとは名誉なこと」と全学の支持を得て開催した。

大会は午前中八名の研究発表、午後は「魯迅における知識人と民衆」をテーマとして、シンポジウムを行っているが、詳細は「日本中国学会報」第23集に収録されているので、ここでは私の感想を列記させてもらう。

その1 シンポジウムで「魯迅と大杉栄」について報告してくれた水本氏（後、山口大学、大分県立芸術文化短大）は日本近代文学会々員であって、われわれの学会員ではなかったが、私共（川北・永末）の人文社会研究室の同僚であり、開催校の一員として、助党になってくれたのである。当時の人文社会研究室は、中文二、日文二、中史二、計六名の構成、従って今大会が成功であったとすれば、それはこの六名の共同作業の成果であったと今も思う。

その2 開催校を終えた勢いで、私共は七十二年初め、教授会に中国語開講を提案した。「技術者に中国語も必要ですか」と驚かれる教授もいたが四月開講が承認された。国交回復より半年前のことである。もちろん、二年間の留学生も混えた中国語学習会を開くという準備期間があったが、なにより学会開催が追い風となった。

その3 学会の日程は新聞の「告知板」に無料掲載してくれる。宣伝にもなるが、市民への学問の場の提供であるし、大学の評価にもつながるものと思う。今大会では長崎市内の中学・高校の教員有志が五・六名聴講してくれた。彼らは月例読書会を開いており、漱石・鴎外・魯迅などの作品を読んでおり、私共、人文研のメンバーも時には参加していたからである。

その4 ガリ刷り「宿舍御案内」から。

長崎市 荘 一泊(二食付) 一、〇〇〇円

一泊(朝食のみ) 七〇〇円

網場町 屋 一泊(二食付) 一、五〇〇円以上

一泊(朝食のみ) 一、〇〇〇円

(魚料理の内容により異なる)

懇親会 屋 (いけす料理予定) 会費 一、五〇〇円

(二度め)

平成五年度

五月二十二日(土) 於 熊本商科大学

二十三日(日) 於 阿蘇司ホテル

「九州中国学会報」第32巻で一目瞭然であるが、ここでは熊日新聞、五月十八日付の「告知板」を紹介してみよう。

九州中国学会 熊本市大江の熊本商科大学で二十二、二十三の両日開く。東京女子大学の竹田晃教授が「中国小説史構成に関する問題一・二」、北京師範大学の郭預衡教授が「陶淵明詩の研究」について特別講演するほか、八人の会員が研究発表する。問い合わせは同大広報室TEL〇九六・三六四・八七二二。

付記1 郭先生のビザ発給が手間取ったことなど、福田会長にご心配をかけたが、懇親会と二日

めは大阿蘇のロケーションに元気づき、なかでも懇親会では郭先生が高名な書家であることが識られ、揮毫してもらおう会員が列を成した。

付記2 今大会も同僚の西氏が卒業生や在校生、非常勤の先生方まで、的確に指示。更に熊本大学の野口、岩松両先生のご助力もいただいた。

(三度め)

平成十五年度

五月十日(土)・十一日(日)

於 熊本学園大学

平成六年、本学は外国語学部と社会福祉学部を新設、名称を熊本学園大学とした。

今大会は外国語学部東アジア学科(中国コース六名)の教員と院生・学部生を含め、満を持して臨んだ。特に今大会では開催校が提案して、会長及び理事会の承認を経て、北京師範大学王寧教授の特別講演を計画した。

ところが、周知の中国における「新型肺炎」の発生により、中止のやむなきにいたった。

中止を決断するまでの会長及び理事の心労を思う時、開催校として、早期に中止を申し出るべきでなかったかと思う。また、今次の教訓として、われわれは「危機管理」の項目を持つべきではなからうかとも思う。

(二〇〇四、二)

## 九州中国学会のことなど

會 澤 卓 司

過日、学会事務局から電話を頂き、琉球大学で引き受けた九州中国学会のことを書いて欲しいと依頼された。その時には、資料を送ってくださいということだったので、簡単に承諾してしまった。しかし、その後で、保存しておいたはずの、琉球大学で開催した時の資料が見つからない。すっかり困り果てていたところ、同僚で九州中国学会員の上里賢一氏から資料の提供をうけることができた。

ところで、事務局から送られてきた資料は、第八代会長をなさった福田殖先生が、二回にわたって「九州中国学会報」に連載された九州中国学会の歴史の抜き刷りである。福田先生のお書きになったものは、史料を丁寧に集め、また、聞き取りなども幅広く行ってきめ細かく書かれており、思わず夢中になって読んでしまった。

それはともかく、福田先生のご指摘によると、琉球大学では第三十一・三十八、四十九回の三回開催されている。

思い起こしてみると、筆者が琉球大学教育学部に赴任したのは一九七四年四月、沖縄が本土に復帰

してまだ二年しか経っていない時であった。その年の五月二十六日、九州大学文学部で開催された九州中国学会第二十二回大会に、初めて参加させて頂いてから今日に至るまで、以後ずっと参加させて頂いていることになる。各県代表者会議にも沖縄県の会員が一人ということもあって、第二十三回大会から筆者が末席を汚すことになった。しかし、筆者の赴任二年後には、法文学部の方に、上里賢一氏が赴任してこられ、早速会員になってもらい、沖縄県は数の上で倍加することになった。

当時、琉球大学は琉球王朝時代の王府であった首里城跡など、歴史的にゆかりのある場所から、もともと集落もできないような野原の湿地帯であった現在の場所に、キャンパスを総合移転することが決まっていた。学会の懇親会の席などで、冗談半分に琉球大学で学会をやって欲しいという話を聞かされるたびに、移転を口実に逃げ回っていた。しかし、最後に残っていた教育学部が移転して数年たった頃、確か第七代会長を務められた、やはり筆者にとっては大学時代の先輩であり、恩師にも当たる町田三郎先生から、その時の会長（第六代）をなさっていた岡村繁先生からも強いご希望があり、福岡の次は琉球でというお話が正式にあって、観念したと記憶している。上里氏と相談した結果、もうこれは引き受けるしかないということになって開催したのが一九八三年の第三十一回大会である。これが沖縄県で始めて開いた九州中国学会である。

この大会は、福田先生の「九州中国学会の歩み（その三）」（「九州中國學會報」第四十巻、平成十四年）にもあるように、沖縄の気候を配慮して頂いて、四月二、四日に教育学部を会場に開かれたものである。参加人数はこれも福田先生の「歩み（その三）」によれば、四十六人と意外に少な目であっ

だが、この時はまだ教育学部も法文学部も大学院を持たない時代で、ゼミの学生数名と上里氏、筆者で、てんでこ舞いをしながら運営に当たっていたせいもあり、それほど少ないという感じはしなかった。東方学会との共催でお招きした講師は、上里氏にとつても、筆者にとつても、東北大学時代の恩師の一人であつた金谷治先生で、講演題目は「中国古代の自然観」というものであつた。大会と直接関係はないが、金谷先生の琉球舞踊を見たいというご要望で、琉球料理を食べながら琉球舞踊を見ることが出来る店にご案内した。解説はこれ以上ないという上里氏が努めたせいもあり、見終わった後、優雅で大変美しい、とても感動したと嬉しそうにおっしゃっていたことが印象深く記憶に残っている。印象深いということであれば、ホテルグランドキャッスルで催した懇親会の席で、今では学会の中心になつておられる柴田先生を始めとする、いわゆる九州大学グループの新進気鋭の若手研究者の方々が、他県とはかなり違う歴史・文化を持った沖縄の地ということもあつてか、少し興奮気味に華やいでおられたことを追記しておきたい。

沖縄での開催二回目は、それから七年後の一九九〇年、第三十八回大会の時である。この時もやはり梅雨を避け、四月二十二日に開催している。会場は法文学部であつた。参加人数は七十人と、前回に比べて大幅に増えている。その中には台湾からの参加者がかなりあつて、この大会を特徴付けているともいえる。ただ、これだけ多くの参加者を迎えたにもかかわらず、大会運営が比較的スムーズに進められたのは、この頃、偶々双方のゼミ生が多かつたこと、そして彼等が献身的に協力してくれたお蔭でもある。東方学会との共催では、九州大学名誉教授で、第四代会長を務められた岡田武彦先生

をお招きしている。講演題目は、「儒教と神秘主義」であった。

三回目は、暫らく時間があいて二〇〇一年、第四十九回大会である。この時は他大学と同じような日程である五月十九・二十日に開催され、しかも前二回と違い二日間にわたって開かれている。ただ、この時期の沖繩は梅雨の真つ最中で、空模様はかんばしくなかつたが、県花である梯梧が真つ赤に花咲く頃で、かえつて沖繩らしくてよかつたのかもしいない。会場は法文学部で、参加人数は延べ一〇二人であり、琉球大学で開催した全三回の大会の中で最大である。

実は、二回目から三回目に至る間、琉球大学自体の組織・施設の設備充実が図られた。その一環として、教育学部、法文学部にも大学院修士課程が設置され、院生の会員もぼちぼち増やすことができるようになり、学会での研究発表にも参加できるようになっていた。教員についても、上里氏の下に、近代文学（特に、台湾文学）を専門とする新進気鋭の星名氏が採用され、早速会員になってもらった。琉球大学以外からも、元高等学校の教諭をされていた島袋氏が参加されるなど、沖繩における九州中国学会会員の幅もかなり厚くなっていた。三回目の第四十九回大会は、このような状況を背景に開くことができたのである。その為、この大会は準備から当日の運営に至るまで、教員、院生、学生が一体となつて取り組み、盛況裏に終えることができたと自負している。

なかでも、この大会の最大の特徴ともいえる、「沖繩と中国との歴史的な関係や中国文化の影響」を考えるためのシンポジウムが「琉球と中国」と題して開かれたことは特筆してもいいだろう。シンポジウムの報告者として、会員外から歴史・言語研究者も迎え、中国文化の受容と展開に関する問題

を、多様な角度から報告してもらっている。その後の議論も活発に交わされ、熱気溢れるシンポジウムであったといえよう（シンポジウムの詳細は、上里賢一「シンポジウム『琉球文化と中国』」、九州中国学会報「第四十巻を参照」）。

（二〇〇四、二）

## 九州中国学会の思い出

岡 村 繁

そのむかし、第一回の九州中国学会が、戦後いくばくも経ない昭和二十八年（一九五三）五月、鹿児島大学の平岡禎吉先生や大分大学の田口正治先生・工藤豊彦先生らの肝煎りで、大分大学学芸学部において開催された。それから星移り物換わり、わが九州中国学会は今年で早くも五十周年を迎えることになったそうである。まことにご同慶に堪えない。

ところで、私にとって九州中国学会との関わりは、今から想えば正に奇縁と言うほかはないが、そ

の第一回九州中国学会の開催より一年ほど前、この学会の前身である九州大学中国学会のところに溯る。それは、忘れもしない昭和二十七年（一九五二）五月二十五日のことであつた。当時、私は旧制の広島文理科大学を卒業してまだ満五年も経つてはおらず、やっと副手から助手に昇格したばかりのころで、もちろん学問の世界の実情など西も東も全く分からない駆け出し時代であつた。ところが思いがけなく、久留米の出身で当時広島文理大の東洋倫理学講師であつた池田末利先生から突然お誘いを受け、その紹介で、ありがたくも生まれて初めて九州大学で研究発表というものをさせていただくこととなつた。まことにありがたい学界進出の第一歩であつた。

とはいえ、そのころ、広島から博多までの交通は、それはそれは並大抵のものではなかつた。もちろん当時すでに関門海底トンネルだけは完成していたけれども、なにしろ敗戦直後のこと、特急もなければ快速もなく、すべて各駅停車で硬座ばかり。私は、時刻の都合上、広島を夕刻に出発して、終点の門司駅に到着したのがその深夜。やむなくプラットホームの休憩室で只一人震えながら寒い一夜を過ごした後、あらためて鹿児島本線の初発列車に乗り換え、再びガタゴトと各駅に停車しながら午前八時やつとのこと。昔の博多駅にたどり着いた。正に難行苦行の学会参加であつた。

しかし、やっぱりこの学会に参加させていただいた収穫は充分にあつた。この時の私の発表題目は「魏晋の人物批評語について」。今でこそ既に常識化していることだが、まだ当時の内外の学界では「体量」「体格」という魏晋時代の人物批評語が、「体性」や「体気」等と同様、人物の稟性とか器量・器度の意味に用いられている事実が明らかにされていなかったので、『三国志』『晋書』『世説新語』

など魏晋の諸文献から可能なかぎりその用例を拾い出して、これを論証したものであった。

幸いにこの発表は、おおむね好評であったように記憶するが、その時、特に目加田誠先生から「しばしば後世の散文に用いられる『体量』tiàng」という語とは、いったいどのような関係に在るのか」とご質問いただいたことが今も極めて印象的である。とっさに私は、宋人の道学関係の文献によく見掛ける用語現象を思い出して、「その『体量』は、私の記憶では宋学の文献などによく出てくる用語のように思いますが、それは、わが身をもって体験して推し量る、という意味に使用されており、魏晋時代の古い用語とは成り立ちが異なるものと考えます」とお答え申し上げた。瞬時の応答としては、まあまあ一応よくできました

なお、この九大での中国学会の時、右記の研究発表をする前に、私が目加田先生の御席へ出席のご挨拶に参上したところ、目加田先生は、すでに私が昭和二十五年（一九五〇年）九月に『文心雕龍索引』を編纂油印したことを覚えて下さって、微笑を浮かべながら「ああ、あなたが岡村さんですか。よく来て下さいました」と気軽に言葉掛けて下さった。先生のこの一言で、私は発表前の異常な緊張がすっかり取れたことを今でも生々しく覚えている。

ところが、それ以後、前後十六年にもわたる長い期間、この九州中国学会と私との関係は、心ならずも全く疎遠な状態がつづくことになった。と言うのは、翌昭和二十八年（一九五三）九月、私が広島大学を去って以降、関西・名古屋・仙台と勤務先を転転とし、どんどん九州から遠ざかっていったからである。

しかるに、思いがけなくも再び九州中国学会に参加しはじめ、しかもこの学会と切っても切れない深い関係を結ぶことになったのは、昭和四十一年（一九六六）十月、目加田先生のご恩顧によって遙かに遠い東北大学から九州大学に転任してきた時からである。

以後、現在まで約四十年間、九州中国学会についての懐かしい思い出は数多くあるが、その中でも特に印象深いものを二、三挙げてみることにしよう

その一つは、現在も引きつづき活用していただいている学会誌の『九州中國學會報』という封面題字の作製時のことである。昭和四十五年（一九七〇）五月、長崎造船大学での第十八回総会で岡田武彦先生が第四代の会長になられた際、それまで創刊以来つづけられてきた学会誌のタイプライター印刷を改めて、次の第十七巻から本格的な学術誌らしく活版印刷にすることが決定し、ついでにその封面題字も、今までのような平凡な一般活字ではなく、思い切って面目を一新することとなった。しかし、そのように一応は決めてみたものの、当時の学会には、その題字のデザインを専門家に委嘱するような予算があるはずもない。そこで編集委員が鳩首相談した末、結局万策尽きて私がこれを作製することになった。幸い私は若い時から多少ながら図案を描くことが趣味だったからである。かくて、それから数日間、私は、縦書きにしようか横書きにしようか、どのような字体なら会員の皆様に気に入っていたか等と、いろいろ考えに考えた末、結局は奇抜な形態を避けて、学会誌らしく御覧のような題字に落ち着いた次第である。その時は一生懸命に時間をかけて書いたはずなのだが、いかんせん結局はあんな拙い文字になってしまつて非常に申し訳ない。

その二つは、九州来任当初、まだ若かった私が身にしてみても痛感し驚愕した当時の九州中国学会の甘つちよろい印象である。こんなことを言えば、今でも差し障りのある向きがあるかも知れないが、それまで長年にわたって一応全国各地の主要な大学を転転としてきた私の目から見た場合、そのころのこの学会には、ほんの一部の現象ながら、研究発表にしても論文投稿にしても、例えば漢詩を器用に短歌や現代詩に訳し替えたり、こまごまと漢文訓読の仕方の当否を云云したりする等、およそ学問の本質には馴染まない、言わば高校漢文教育の延長のような雰囲気が濃厚に、しかも無反省に漂っていた。このような安易で独り善がりな雰囲気は、当時、学問的な意気に燃えてわざわざ九州まで赴任してきた私にとって到底耐え切れないものであった。この非学問的雰囲気は、将来内外の厳しい学界に進出してゆかねばならない若い研究者たちのためにも、一日も早く身を挺して払拭しておかなければならない旧弊であった。幸い現今では、学問的意欲に燃えた若い会員が多数を占めるようになって、このような危惧がすっかりなくなり、ご同慶の至りである。

その三つは、昭和五十一年（一九七六）五月、私が荒木見悟先生の後を承けて第六代の会長に就任していた二期八年間、会計上の都合で学会報が毎年発行できなくなり、やむなく隔年出版にせざるを得なくなったことである。この処置は、当時の会員数と出版費との均衡上、まことにやむを得ない臨時の措置であったとはいえ、学会の発展を願ひ、若い研究者たちの無念さを思うと、なんとも遣り切れない、口惜しい限りであった。しかし、この苦惱も、町田三郎先生が第七代の会長に就任されるに至って、会費も大幅に増加し会員もまた大幅に増加して、やっと十数年ぶりに解消することとなり、

これまた嬉しい極みである。

そのほか、昭和四十六年（一九七一）五月、久留米工専で開催された第十九回大会において「秦漢時代における楚辞文学の分裂現象」という研究発表をしたこと、越えて昭和六十年（一九八五）五月、大分大学で開催された東方学会・九州中国学会共催の公開学術講演に、東方学会の派遣講師として「文選と玉台新詠」という講演をしたこと等も懐かしい思い出だが、私事にわたるので詳細は省略する。

最後に、九州中国学会が、全国有数の重要な学会として今後ますます発展されることを祈念してやまない。

（二〇〇四、二二）

## 思い出すままに

町 田 三 郎

一九八五年、昭和六〇年から一九九一年の平成四年までの二期八年の間、私は九州中国学会の七代会長を勤めた。この間の学会及びその周辺のことどもを思い出すままに述べてみたい。

九州中国学会そのものは戦後まもなく結成され、歴代の会長、会員の努力や創意工夫によつて私の就任時には会則などもおおかた整備され特別の問題はなかった。したがつて私が急いで解決せねばならない懸案はとりたててなかった。総体として学会の発展期であつた。

通常中国学の研究者は、全国組織である「日本中国学会」の会員となり、全国大会に参加し、研究発表を行い、また学会報に投稿する。これが一般的である。そしてこれに対応する形で各地に大小の研究會、学会が結成される。この地方的な学会を代表するものが、東北大学を中心とした東北中国学会であり、九州大学を軸に組織される九州中国学会である。この二つの学会は戦後ほとんど同時期に結成され、活発に活動して今日に及んでいる。この二学会は年一回各県まわり持ちでの大会開催というのも同様で、会員数も似たりよつたりである。ただその相違点をあげれば、九州中国学会が主とし

て中文・中哲の研究者の集まりで、時に欠号があるにせよ独自の学会報を持続的に発行しているのに対して、東北のそれは東洋史をも含む中国学全般の研究者の組織で、しかも会報を持たないということである。

私が就任した昭和六〇年には、九州中国学会の会員数は一五〇名をこえ、しかも年々増加する傾向であった。このことは会員の会費収入にたよる学会運営にとってはきわめて好都合であった。しかも数年前から「東方学会」との共催が進行してい、「東方学会」からは講師派遣とともに補助金の提供もあつて、学会運営はしだいに余裕を生じてきた。そこで平成三年からは学会誌の隔年発行をやめ毎年の発行を原則とした。またその年度の大会開催校に補助金を増額して中国あるいは韓国から一名の学者を招聘することができるようにした。

「東方学会」との共催は、何よりも中央で活躍する第一線の学者の直近の研究課題を毎年講演という形で聞くことができ、かつ親しく交歓する場がもてたことで、有益にして刺激的であった。ややもすれば地方の仲間同志の懇親会にもなりかねない研究会を、ともかくも当代を代表する学者を前にして発表する場に変えたわけで、発表者も聴衆も心の昂揚を覚えずにはいられないものであった。ある意味で中央との距離が縮まり、地方において全国を見渡す学会にいるかの感があつた。「東方学会」との共催は、まことに九州中国学会の一時期を画するものであった。

私の任期中「東方学会」からの派遣講師としてご講演をいただいた岡村繁 三上次男 福井文雅 護雅夫 伊藤漱平 岡田武彦 神田信夫の諸先生に心から御礼を申しあげたい。

私の手帖にこんなメモがある。

昭和六年五月一八日 はれ 会場担当九大。思いきって大学の外で学会を開こうではないかとの発議があり、太宰府天満宮にお願ひして会場を域内の文華殿を借用。個別研究及び三上次男教授の特別講演を行う。懇親会は池に臨む茶店。

六三年五月二九日 はれ 九大教養部 参加一〇〇名超。懇親会は博多会館。出席五三名。諸先生より「好評」の聲あり。

六四年五月一四日 はれ 会場宮崎大学。根井康雄教授にお世話になる。この日台湾淡江大学の王文進、龔鵬程、王仁鈞の諸氏参加。夜、ひまわり荘。

メモは余りにも断片的で、記録ともいえないが、それでも往時を追懐するよすがとはなる。ただ六三年の「好評」とあるのは、学会そのものなのか、懇親会の賑わいをいうのか、意味不明。

さて五〇年代半ばから徐々に留学生や外国の研究者の学会参加が目立つようになってきた。いわば九州中国学会は、一面で「東方学会」との共催で中央と連結し、一面で外国人研究者の参加する国際会議的な色彩を持つものとなっていった。たとえば北京大学の張少康教授、台湾師範大学の黄錦鉉教授、ソウル大学の金学主教授、李炳漢教授らは、学会の常連であった。

思えば五〇年代はアジア諸国の覚醒期であった。わが国の中国研究においても一種の中国信仰の呪縛から解放されて自由な目でアジア諸国をみるようになってきた。それにともなって諸国との交流も活潑化してきた。たとえば五〇年代の後半から九大の中哲・中文の研究室は、韓国のソウル大

学中国学と定期的な学术交流をもつに至った。もともとはソウル大の崔完植教授が宋明の資料を求めて九大を訪ねられたのがキツカケで、しばらくは個人的に交流を行っていたがいつの間にか研究室単位で交流しようとの話となり、一年ごとに相互に行き来し研究会を行うこととなったものである。九大での研究会はきまつて七月十五日。夏休みということもあるが、実は十四日に来日し、翌十五日早朝の「追いやま」を見物するためであった。

こうしたアジア諸国との交流で忘れてならないのは台湾師範大学の黄錦鉉教授の存在である。黄教授と九大との関わりは、一九八〇年、昭和五五年の秋から始まる。この年教授は九大文学部に訪問研究員として着任され、翌年の春帰国された。教授の専攻は諸子研究で、たまたま専攻を同じくする私と接触する機会が多かった。教授は以前阪大に留学された経験もあってわが国の学界にも通じていた。またすでに数冊の著書も刊行されていて私にとっては少々まぶしい存在であった。同時に叩けば開かれる智慧の宝庫であった。帰国されてのちも往来はつづいた。

そうこうするうちに日台韓の学者を中心に中国域外の漢籍調査を行ってはどうかとの話がもち上がり、さっそく黄教授の人脈をたよりにして準備会が結成され、わが国からは明治大学神田信夫教授、台湾からは台湾大学陳捷先教授らが代表となり、一九八六年に第一回の「中国域外漢籍国際会議」が東京の明治大学講堂で盛大に挙行され、その翌年分厚い論文集が刊行された。以後およそ一〇年にわたってこの会議は日台はもとより韓国やハワイでも開催され、そのつど論文集も刊行され、学界に大きな貢献を果たした。また各国の学者間の交流に決して小さくはない便宜を与えもした。これも会議成

立の橋渡しをされ、その後も種々ご協力をいただいた黄教授の巾広い交友関係、そのお人柄に負うものであった。

さて、黄教授が九大に訪問研究員として着任された時、中国文学の外国人講師は劉三富氏（現福岡大教授）であった。劉氏は実は黄教授が台湾の淡江文理学院時代の教え子であった。こうした師弟関係に同学の私に加わって、しだいに台湾の諸大学との情報交換や人事交流が盛んになっていったのである。

再び手帖のメモ

平成三年五月一日 くもり 会場 九大文学部

特別講演

中国古典詩歌が描いた理想世界 ソウル大学 李炳漢教授

清朝勃興期の城址 明治大学 神田信夫教授

（東方学会・九州中国学会共催）

五月一二日 はれ 会場 同じ

個別研究発表 九時半より 一一名

終了後、新たに岡村繁九大名誉教授の司会による「『文心雕龍』シンポジウム」が開催される。基調講演は汕頭大学馬白教授と台湾師範大学王更生教授。それぞれ二十分。基調講演につづいて台湾師範大学黄錦鋹教授、ソウル大学李炳漢教授らが質疑を提出し、これに馬・王教授が回答。会場

からの質問もあり、司会の岡村名誉教授や北京大学張少康教授らがさらに討論の輪を広げ、予定の時間を過ぎた六時散会。交歓会は「あと山」。

その後黄錦鉉・王更生両教授はこの会議をさらに拡大結束した論文集の刊行を企図し、日台中韓の専門家に広く呼びかけて論文を求め、これを集約して「『文心雕龍』国際學術研討會論文集」（台北文史哲出版社一九九二年）を刊行する。

思えばこうした学术交流の会議というものも、九州中国学会と「東方学会」との結びつきこそ直接的であったが、ソウル大との交流や「中国域外漢籍會議」「文心雕龍研究会」との交流は、いずれも直結するものではない。派生的あるいは二次的な関係といつてよい。しかし学会としてようやく確固とした基盤と評価とをかちえていた九州中国学会が根底にあってこそはじめて成立した學術會議であった、とふり返つてつくづく思うのである。

一九九一年、平成三年の韓国ソウルで行われた「中国域外漢籍國際會議」の報告の末尾に私はおおよそ次のようなことを書いた。

この学会での参加者の顔ぶれは年ごとに変るとはいえ、そこにはいくつもの昨年、一昨年と見慣れた顔がある。互いに特別に語り合うことはないにしても、懐かしいものである。何かことが生じたとき、気軽に相談をもちかけられる雰囲気である。同志的な親密さでもいろいろものであるうか。これも回を重ねてきたこの「會議」の余慶とでもいふべきものであるう。私はこういうムードを高く評価する。（早稲田大学 東洋の思想と宗教 8号）

（二〇〇四、二）

第三部  
史  
料

1 九州大学中国学会研究発表一覧 (1)

昭和二十二年五月二十五日	王静安釋禮補遺	石黒 俊逸
	詩六月「有敵有翼」解	池田 末利
	豊字考	竹内 照夫
昭和二十三年一月十七日	紅樓夢評論	吉田 幸夫
昭和二十三年六月六日	中国古代思想の抽象性について	松本 雅明
	東亜教育史の構想	佐藤 清太
	穀稲粟と米	日野開三郎
昭和二十四年四月二十八日	支那學研究法について	鈴木 喜一
	事と理の問題	荒木 見悟
昭和二十四年十一月五日	貝原益軒「氣」説	牧 克己
	廣瀬淡窓の思想とその実践について	井上 源吾
	身術と心術	岡田 武彦
	人稱代名詞を通して見た論孟の比較	田口 正治
	謝靈運と自然	小尾 郊一
	鬼と龍	池田 末利

昭和二十四年十一月五日	大極圖説の論理的意義	友枝龍太郎
	思無邪について	目加田 誠
	論語に現れた小人について	林 秀一
昭和二十五年一月二十一日	老子と孟子	山下 通雄
	李白の年譜について	黒木 好江
昭和二十五年四月三十日	マックスウェーバー「儒教と道教」批判	山下 通雄
昭和二十五年六月十七日	中国の演劇について	濱 一衛
	荀子性論に於ける偽について	高畠 穰次
同年十二月九日	莊子養生篇について	鈴木 喜一
	顧憲成の當下論について	岡田 武彦
昭和二十六年一月十三日 (中國語文學會)	現代標準語の名詞について	那須 清
	中国の新劇發展途上に於ける舊劇の抵抗	濱 一衛
	張横渠の氣説と貝原益軒の氣説について	牧 克己

(「日本中国学会報」第二集(昭和二十六年三月発行)より転載)

② 九州大学中国学会研究発表一覧 (2)

昭和二十六年二月四日	最近の中国について	影山 巍
昭和二十六年五月二日	中国に於ける道徳意識の起源について	山室 三良
昭和二十六年六月十七日 (大会)	支那思想に於ける人倫的なるものと超越的なるもの	湯浅 幸孫
	機根の問題	荒木 見悟
	廣瀬淡窓の教育論について	井上 源吾
	天地は人格的存在であるか 益軒宇宙論	牧 克己
	論語研究	白石 眞吾
	荀子篇章考	友枝龍太郎
	僧義堂の学術と其特色	古澤未知男
	尸考	池田 末利
	孔子の政治説	石黒 俊逸
	中国古典に於ける人称代名詞の一考察	田口 正治
昭和二十六年十二月九日	郭沫若、荀子的批判についての断片的感想	高畠 穰次
	秋月の陽明学者	山室 三良
	元曲風俗劇を読んで	永井 重義

(「日本中国学会報」第三集(昭和二十七年三月発行)より転載)

③ 九州大学中国学会研究発表一覧 (3)

一月二十六日	春柳社上演の黒奴鍾天録について	濱 一衛
	王維	目加田 誠
	無障碍の立場	荒木 見悟
五月二十五日	詩「不愧子屋漏」解	池田 末利
	魯の兄弟相及について	江頭 廣
	魏晋の人物批評語について	岡村 繁
	儒林外史にもれる人間観寸考	倉光 卯平
	三浦梅園の反観論について	田口 正治
	屈原賦に対する一考察	藤田 秀雄
	僧中巖と杜少陵	古澤未知男
	特別発表	
	宋学に於て働いた一理念(全體大用)について	楠本 正継
六月二十九日	中国語のアクセントについて	那須 清
	宋学に於て働いた一理念(全體大用)について(其の二)	楠本 正継
十月五日	東林学について	岡田 武彦

(「日本中国学会報」第四集(昭和二十八年三月発行)より転載)

4 第一回九州中国学会大会研究発表一覽（昭和二十八年、於大分大学）

五月二十三日	講演会	中国現代の文学 三浦梅園と戴東原	九大教授 目加田 誠
五月二十四日	研究発表会	社の起源 一生一及制と昭穆制度との関係について 東林学について 冰心小説の印象 三三 廣瀬淡窓の研究 析玄に現われた処世観について 茅盾の人物描写の方法 子夜論 梅園玄語研究の一端 淮南子に現われた気について 白楽天の詩に於ける諷諭と風情	元東大教授 高田 眞治 広島大学 池田 未利 佐賀高校 江頭 廣 九州大学 岡田 武彦 西南学院大学 倉光 卯平 大分大学 工藤 豊彦 九州大学 小西 昇 大分大学 田口 正治 鹿児島大学 平岡 禎吉 熊本女子大学 古澤未知男

	漢学の再出発	大分大学 松田 正義
	「居徳則忌」の解釈 支那古典解釈上の諸問題	鹿児島大学 山下 静雄
	史記孟子荀卿列伝の構成	山口大学 石黒 俊逸

九州大学中国学会

六月十四日	新中国に於ける漢字の取扱について	影山 巍
十一月十四日	吉川幸次郎氏を囲む座談会	
十一月十九日	老子の思想の根底にある「道徳」に就いて	瀬戸口拓雄
	藤澤浅二郎と曾孝谷	濱 一衛

（「日本中国学会報」第五集（昭和二十九年三月）より転載）

⑤ 第二回九州中国学会大会研究発表一覽（昭和二十九年、於福岡学芸大学）

九大中國學會

昭和二十九年五月二二日

一、老子の思想の根底にある「道德」について「其の二」

瀬戸口拓雄

一、佐伯文庫實地調査報告

山室 三良

昭和二十九年九月一八日

一、學問に於ける友情

山室 三良

——安東省庵と朱舜水——

岡田 武彦

一、明代陽明學主靜派の學的精神

昭和二十九年 九州中國學會

（六月五・六日 於福岡學藝大學）

公開講演

一、現代文明と東洋の意味

九州大學助教授

山室 三良

一、學問の變遷

高田 眞治

研究發表

一、論語大廟章より

——禮と知の問題

九州大學

岡田 武彦

一、中國現代作家達と「家」

九州大學

小西 昇

” ”

上尾 龍介

樋口 進

一、老子の思想の根底に在る道德について

嘉穂高校

瀬戸口拓雄

一、陰陽思想の成立に關する一考察

鹿兒島大學

平岡 禎吉

一、周易文言の本文批判的研究

鹿兒島大學

山下 靜雄

一、漢代人の言語意識について

——揚雄の方言——

宗像高校

桑野 正尚

一、蘭亭詩について

廣島大學

小尾 郊一

一、文選より隋への契機

——開府について——

戸畑高校

難波江通泰

一、漢詩文引用より見た源語と朗詠

熊本女子大學

古澤未知男

一、乾嘉間清鮮文化交流の一斷面

廣島大學

山口 義男

一、紅樓夢所作態度の一考察

西南大學

倉光 卯平

一、魯迅の位置

——中國現代文學の基點——

九州大學

上尾 龍介

一、安井息軒の學問について

宮崎大學

黒江 一郎

一、廣瀬淡窓の鬼神論について

大分大學

丁藤 豊彦

一、三浦梅園玄語初稿元氣論について

大分大學

田口 正治

一、客話與白話

北九州大學

林盛 達

6 『九州中国学会報』 目次（第一巻～第三巻）

九州中国学会報 第一巻 目次（昭和三十年）

「齊物論」といふ篇名に因みて

中国語音韻学から見た兩類別をもつ萬葉仮名原音の対差点 續篇

「益齋遺稿」について

淮南子に見えたる生命觀

研究発表

鬼谷子について

李白の求仙游仙詩に対する一考察

嬴公逆祀について

繫辞伝に於ける易の本質觀の展開

宋元明話本の構造

巴金の信念

呂氏春秋の「反古」について

三浦梅園の會易說について

公開講演

五月二十八日

漢碑と漢代文化

五月二十九日

現代中国に於ける文学遺産継承の問題

九州大学	福岡学芸大学	宮崎大学	鹿児島大学	九州大学	佐賀大学	佐賀大学	佐賀高校	鹿児島大学	九州大学	筑紫丘高校	大分大学	大分大学	東京教育大学教授	九州大学教授
楠本正継	真武直	黒江一郎	平岡禎吉	佐藤仁	藤田秀雄	江頭廣	山下静雄	小西昇	樋口進	工藤豊彦	田口正治	内野熊一郎	目加田誠	

発刊の辞 会長 楠本正継

一、王学正統派の学的精神

二、譯文考

三、苦吟と象徴 李賀の表現手法について

四、脇瀨室の詩碑

五、廣瀨淡窓の約言について

六、旭莊と息軒

七、南北朝以前における仏教と儒教・道教

八、圭峰宗密における儒道人生説批判

九、時習館三代の儒学思想

十、李白の詩に表われたる色彩語の一考察

十一、日本書紀に現はれたる異世代の婚姻について

十二、中国近代史上における太平天国

十三、繫辞伝に於ける『易』の本質観の展開

十四、古代人の太陽観について

九州大学 岡田武彦  
久留米大附設高校 大石亀次郎

九州大学 上尾龍介

大分大学 田口正治

大分大学 工藤豊彦

宮崎大学 黒江一郎

大宮高校 佐伯恵達

大淀高校 美原道輝

熊本女子大学 古澤未知男

佐賀大学 藤田秀雄

佐賀高校 江頭秀廣

鹿児島大学 竹之内安己

” ” 山下静雄

” ” 平岡禎吉

精神について

論語仁字章に於ける一考察

詩經の置字語に対する一考察

曾子の義用と其の和訓

李賀と孟郊 孤高の意識をめぐって

僧中巖と李白・杜甫

安井滄洲「尚白集」について

中国における禅の源流

曇鸞の梵焼仙經事件について(その一)

心学道話についての一考察

漢詩吟味

北京語音韻論の問題点

平岡禎吉	田口正治	藤田秀雄	井上壽老	上尾龍介	古澤未知男	黒江一郎	美原道輝	佐伯恵達	藤井竜誓	大石亀次郎	那須清
------	------	------	------	------	-------	------	------	------	------	-------	-----

7 昭和三十三年度九州地区中国学会・西日本中国語文学会  
研究発表一覧 (五月二十四日・五日 西南学院大学)

日本上代漢字音の研究 (中国音韻よりみた万葉仮名の二断面)	福岡学芸大 後藤ユキヨ
陸徳明音の特質	" 占部 玄海
堯典の四仲中星と瑳瑤玉衡	中津南高校 佐藤 邦一
禽言について	北九州大 林 盛道
愛之理	西南学院大 猪城 博之
朱子家禮についての一考察	広島大 兼永 芳之
「亂」の一傾向について	愛媛大 中島 千秋
万葉「簾動之秋風吹」の典據	熊本女子大 古澤未知男
周作人について	筑紫丘高校 樋口 進
音声面に現われた現代漢語語法の一斑	九州大 那須 清
新春朕に見る文體と内容	久留米大 鮫島 國三
蘇東坡の詩より	西南学院大 倉光 卯平
上声の変調について	九州大 影山 巍
荀子の性悪説について	西南学院大 三串 一之
特別発表	
周代金文の押韻目から見た漢字音の変遷	福岡学芸大 眞武 直

(「日本中国学会報」第十一集(昭和三十四年十月発行)より転載)

8 昭和四十六年度九州中国学会大会日程表  
(五月十六日(日) 久留米工業高等学校図書館)

九〇〇・九五〇	受付	
九五〇・九五五	開会式	
	研究発表(午前・午後)	
一〇〇〇・一〇二五	嵯康の音楽思想	羽床 正範 (九大大学院)
一〇二五・一〇五〇	三浦梅園の哲学 程朱学的性説批判を中心として	高橋 正和 (別府大学)
一〇五〇・一一一五	巴金とアナキズム	樋口 進 (西南学院大学)
一一一五・一二四〇	宋儒 陳澧について 北宋における士人の精神生活	荒木 見悟 (九州大学)
一二四〇・一二〇五	韓愈 雑説の読みかたについて	高橋 君平 (鹿児島短大)
一二〇五・一二二五	記念撮影	(一階 玄関前)
一二二五・一二三〇	休憩	
	各県代表者会議	(二階 図書館土庫室)
	研究発表(午後・後部)	
	張横渠と程伊川の礼について	(二階 視聴覚教室)
一三三〇・一三三三	秦漢時代における楚辞文学の分裂現象	樋口 治 (福岡教育大学)
一三三三・一四〇〇	(報告)台湾の学術事情	岡村 繁 (九州大学)
一四〇〇・一四一五	(シンポジウム)	矢嶋 徹輔 (九州大谷短大)
一四一五・一四三〇	朱子の思想と文学	司会 岡田 武彦 (九州大学)
一四三〇・一六三〇	総会	発表者 上野日出乃 (久留米高専)
一六三〇・一七〇〇	懇親会	発表者 吉田公平 (九州大学)
一七〇〇・二〇〇〇		(二階 視聴覚教室) (正源寺)

⑨ 東方学会・九州中国学会共催公開学術講演会一覧

回数	西暦	元号年	開催校	講師	講演題名
第一回	一九八〇	昭和五五	九州大学(文学部)	山本 達郎	東南アジアの基層文化
二	八一	五六	佐賀女子短大	榎 一雄	もう一つのシルクロード ——東西交通史上の南アフガニスタン——
三	八二	五七	福岡大学	赤塚 忠	中国古代思想と屈原の文学
四	八三	五八	琉球大学	金谷 治	中国古代の自然観
五	八四	五九	西南学院大学	入矢 義高	王梵志という詩人
六	八五	六〇	大分大学	岡村 繁	『文選』と『玉台新詠』
七	八六	六一	九州大学(太宰府天満宮)	三上 次男	宋元時代の陶磁貿易と元染付
八	八七	六二	鹿児島大学	福井 文雄	欧米における中国宗教研究の過去と現在
九	八八	六三	九州大学(教養部)	護 雅夫	メヴレヴィー教団の施舞について ——小アジア・内陸アジア・日本——
一〇	八九	平成一	宮崎大学	伊藤 ■平	滝沢馬琴と曹雪芹——和漢の二大小説家の接点——
一一	九〇	二	琉球大学	岡田 武彦	儒教と神秘主義
一二	九一	三	九州大学(文学部)	神田 信夫	清朝勃興期の城址
一三	九二	四	長崎大学	戸川 芳郎	経史について——漢魏期の史官
一四	九三	五	熊本商科大学	竹田 晃	中国小説史構成に関する問題点一、二
一五	九四	六	久留米大学	尾藤 正英	日本の朱子学と陽明学
一六	九五	七	福岡教育大学	清水 茂	中国口語文学の発展と女性
一七	九六	八	鹿児島純心女子大	町田 三郎	西村天囚と九州
一八	九七	九	佐賀大学	田仲 一成	目連戯の地方脚本について
一九	九八	一〇	大分県立芸術文化短期大学	吉川 忠夫	六朝末隋唐初の儒林と仏教

10 九州中国学会大会開催校と学会報発行一覽(第一回～第五十回)

回数	西暦年	元号年	開催校	月 日	県名	学会報	会長名(就任年)
一	一九五三	昭和二八	大分大学	五月三・二四日	大分		初代 楠本 正継
二	五四	二九	福岡学芸大学	六月五・六日	福岡	第一卷	
三	五五	三〇	鹿児島大学	五月二八・二九日	鹿児島		
四	五六	三一	九州大学(文学部)	五月二七日	福岡		
五	五七	三二	熊本女子大学	五月二五・二六日	熊本		
六	五八	三三	西南学院大学	五月二四・二五日	福岡		
七	五九	三四	宮崎大学	五月	宮崎		
八	六〇	三五	長崎大学	五月二日	長崎		第二代 目加田 誠
九	六一	三六	九州大学(文学部)	六月三日	福岡		
一〇	六二	三七	佐賀大学	四月一七日	佐賀		
一一	六三	三八	福岡学芸大学	六月九日	福岡		
一二	六四	三九	宮崎大学	五月二四日	宮崎		
一三	六五	四〇	西南学院大学	五月二五日	福岡		
一四	六六	四一	鹿児島大学	五月二日	鹿児島		
一五	六七	四二	九州大学(文学部)	五月二日	福岡		第三代 山室 三良
一六	六八	四三	大分大学	五月二六日	大分		
一七	六九	四四	福岡教育大学	六月一日	福岡		
一八	七〇	四五	長崎造船大学	五月三日	長崎		
一九	七一	四六	久留米高専	五月一六日	福岡		第四代 岡田 武彦
二〇	七二	四七	北九州大学	五月二八日	福岡		
二一	七三	四八	佐賀大学	五月二〇日	佐賀		第五代 荒木 見悟
二二	七四	四九	九州大学(文学部)	五月二六日	福岡		
二三	七五	五〇	都城高専	五月五日	宮崎		
二四	七六	五一	福岡教育大学	五月三〇日	福岡		
二五	七七	五二	鹿児島高専	五月二九日	鹿児島		第六代 岡村 繁

五〇	〇二	一四	九州大学(文学部)	五月二・一二日	福岡	四〇	第十代 岩佐 昌暲
四九	〇一	二三	琉球大学	五月一九・二〇日	沖繩	三九	
四八	二〇〇〇	二二	都城高专	五月二〇・二一日	宮崎	三八	
四七	九九	二一	福岡大学	五月二五・二六日	福岡	三七	
四六	九八	一〇	大分県立芸術文化短大	五月二六・二七日	大分	三六	
四五	九七	九	佐賀大学	五月二四・二五日	佐賀	三五	
四四	九六	八	鹿児島純心女子大学	五月二八・二九日	鹿児島	三四	
四三	九五	七	福岡教育大学	五月二〇・二一日	福岡	三三	
四二	九四	六	久留米大学	五月二・二二日	福岡	三二	
四一	九三	五	熊本商科大学	五月三・二三日	熊本	三一	
四〇	九二	四	長崎大学	五月三・二四日	長崎	三〇	第八代 福田 殖
三九	九一	三	九州大学(文学部)	五月一・二二日	福岡	二九	
三八	九〇	二	琉球大学	四月二日	沖繩	二八	第七代 町田 三郎
三七	八九	平成一	宮崎大学	五月二四日	宮崎	二七	
三六	八八	六三	九州大学(教養部)	五月二九日	福岡	二六	
三五	八七	六一	鹿児島大学	五月二七日	鹿児島	二五	
三四	八六	六〇	九州大学(太宰府天満宮)	五月二八日	福岡	二四	
三三	八五	五九	西南学院大学	六月三日	福岡	二三	
三二	八四	五八	琉球大学	四月二四日	沖繩	二二	
三一	八三	五七	福岡大学	五月九日	福岡	二一	
二九	八一	五六	佐賀女子短大	五月二四日	佐賀	二〇	
二八	八〇	五五	九州大学(文学部)	五月二五日	福岡	一九	
二七	七九	五四	熊本大学	五月二〇日	熊本	一八	
二六	七八	五三	福岡女子大学	五月二八日	福岡	一七	

11 学会報編輯世話人一覽

会 長 楠 本 正 継

九	福	佐	佐	熊	熊	長	北	舞	宮	大	大	鹿	鹿
大	岡	江	藤	津	古	井	中	宇	黒	美	大	大	大
大	武	頭	田	下	澤	上	田	田	江	原	高	大	大
大	武	秀	秀	正	未	善	正	千	一	道	高	大	大
大	直	雄	雄	章	知	源	勝	雄	郎	輝	高	大	大
大	彦	廣	廣	廣	男	吾	治	治	郎	郎	高	大	大
大	彦	直	雄	章	男	吾	治	治	郎	輝	高	大	大
大	彦	直	雄	章	男	吾	治	治	郎	輝	高	大	大
大	彦	直	雄	章	男	吾	治	治	郎	輝	高	大	大

編輯人 平 岡 禎 吉

(九州中国学会報 第三卷所載)

12 昭和四十七年度(第二十回)九州中国学会大会参加者名簿(北九州大学)

氏名	所属	懇親会	氏名	所属	懇親会
青木 陽岳	鞍手商高	×	中田 喜勝	長崎東高	
秋吉久紀夫	近畿大		永末 嘉孝	長崎造船大	
荒木 見悟	九大		中屋敷 宏	筑紫女学園短大	
安東 俊六	九大		那須 清	九大	×
井上 源吾	長崎大		難波 征男	九大大学院	×
上野日出刀	久留米高専		能美 徹	北九大	
王 徳新	北九大		服部 昌之	北九大	
岡田 武彦	九大		濱 一衛	九大	
岡村 繁	九大		林田慎之助	九大	
江頭 廣	佐賀大		疃田 啓佑	都城高専	
加来 忠	小倉高校	×	樋口 進	西南学院大	
加藤 秀雄	北九大		日高 明	都農高	×
上尾 龍介	九大		平岡 禎吉	久留米高専	
工藤 豊彦	大分大	×	福田 殖	久留米高専	
熊谷 治	九齒大	×	福富 栄三	小倉高校	
隈本 宏	久留米高専		藤井 眞次	門司北高	
倉光 卯平	西南学院大	×	前山 禮次	福岡中央高	×
兒玉 六郎	鹿児島高専		松崎 治之	福岡中央高	×
小林 安司	北九大		麦生登美江	九大大学院	×
菰口 治	福教大		諸井 耕二	宇部高専	×
佐藤 仁	九大		矢嶋 徹輔	九州大谷短大	×
高橋 君平			安山 暁		×
高橋 正和	別府大		山村 裕美	長崎西高	×
多賀 浪砂	福岡商高	×	山本 哲也	北九大	
滝口 義毅	福岡商高	×	吉田 公平	北九大	
垂永 英彦	香椎工高	×	吉田 幸夫	北九大	
鶴田 義郎	熊本商大				

13 平成十四年度(第五十回)九州中国学会大会参加者名簿(九州大学)

	氏名	所属	第1日	第2日	懇親会
1	会沢 卓司	琉球大学教育学部			
2	秋吉 卓司	佐賀大学文化教育学部			
3	秋吉久紀夫				
4	明木 茂夫				
5	安部 力	九州大学(院)			
6	荒木 雪菜	西南学院大学(院)			
7	荒木龍太郎	活水女子大学			
8	韋 海英	福岡大学人文学部			
9	石井 望	長崎総合科学大学			
10	石田 和夫	福岡大学人文学部			
11	板谷 俊生	北九州市立大学外国語学部			
12	板谷 秀子	北九州市立大学外国語学部(非)			
13	岩佐 昌暲	九州大学			
14	岩松 久雄	熊本大学教養部			
15	上里 賢一	琉球大学法文学部			
16	上野日出乃				
17	牛尾 弘孝	大分大学教育福祉科学部			
18	薄井 俊二	埼玉大学教育学部			
19	運天亜紀子	琉球大学(非)			
20	海老田輝巳	北九州市立大学(非)			
21	王 毓雯	九州大学(院)			
22	王 京鈺	九州大学(院)			
23	王 愿琦	九州大学(院)			
24	王 孝廉	西南学院大学			
25	王 貞明	西南学院大学(院)			
26	王 文亮	九州看護福祉大学			
27	大野 修作	京都女子大学			

	氏名	所属	第1日	第2日	懇親会
28	岡村 繁	九州大学(非)			
29	岡村真寿美	九州大学(非)			
30	甲斐 勝二	福岡大学人文学部			
31	垣見美樹香	九州大学(院)			
32	金縄 初美	西南学院大学(院)			
33	神鷹 徳治	明治大学文学部			
34	桐島 薫子	筑紫女学院大学			
35	切通しのぶ	熊本学園大学(院)			
36	日下みどり	九州大学			
37	隈本 宏				
38	慶谷 壽信	長崎外国語大学外国語学部			
39	黄 冬柏	九州大学(非)			
40	合山 究	九州大学			
41	小崎 太一	熊本大学(非)			
42	胡 山林	佐賀大学(非)			
43	後藤 岩奈	県立新潟女子短期大学			
44	菰川 恒彦	神奈川県立鶴見高等学校			
45	菰川 治				
46	近藤 則之	佐賀大学			
47	佐藤 昭	北九州市立大学			
48	重松 詠子	九州大学聴講生			
49	静永 健	九州大学			
50	柴田 篤	九州大学			
51	鳥袋 盛慎	琉球大学(非)			
52	蕭 燕婉	九州大学(院)			
53	蔦 士珍	熊本学園大学外国語学部			
54	新谷 秀明	西南学院大学			



14 大会出席者数・会員数・学会費・学会報発行一覽(第一回、第五十回)

回数	西暦年	元号	開催校	出席者数	会員数	普通会費	維持会費	学会報巻数
一	一九五三	昭和二八	大分大学					
二	五四	二九	福岡学芸大学					第一巻
三	五五	三〇	鹿児島大学					
四	五六	三一	九州大学(文学部)		一一一			
五	五七	三二	熊本女子大学	四五	一一〇			
六	五八	三三	西南学院大学					
七	五九	三四	宮崎大学					
八	六〇	三五	長崎大学	三十八				
九	六一	三六	九州大学(文学部)					
一〇	六二	三七	佐賀大学		二八(維持会費一八名)			
一一	六三	三八	福岡芸術大学	七九	二九(維持会費七名)			
一二	六四	三九	宮崎大学		一一〇	四〇〇円	一〇〇〇円	一〇
一三	六五	四〇	西南学院大学		一二四			
一四	六六	四一	鹿児島大学		一〇七			
一五	六七	四二	九州大学(文学部)		一一二			
一六	六八	四三	大分大学		一一二			
一七	六九	四四	福岡教育大学		一一三			
一八	七〇	四五	長崎造船大学		一〇〇			
一九	七一	四六	久留米高専		一〇七	七〇〇円	一七〇〇円	一六
二〇	七二	四七	北九州大学	五七	一〇七			
二一	七三	四八	佐賀大学		一一一			一九
二二	七四	四九	九州大学(文学部)					
二三	七五	五〇	都城高専	四〇	一一八	一〇〇〇円	二〇〇〇円	二〇
二四	七六	五一	福岡教育大学	六二				

出席者数は大会開催校の出席名簿による。会員数は主として学会報掲載の会員名簿による。会費は学会報記載による。

五〇	〇二	一四	九州大学(文学部)	一〇六	二六九		四〇
四九	〇一	一三	琉球大学	一〇二	二六六		三九
四八	二〇〇	一二	都城高専		二六〇		三八
四七	九九	一一	福岡大学		二五八		三七
四六	九八	一〇	大分県立芸術文化短大		二二〇		三六
四五	九七	九	佐賀大学	九七	二二六		三四
四四	九六	八	鹿児島純心女子大学		二二六		三三
四三	九五	七	福岡教育大学	一一〇	二二〇		三二
四二	九四	六	久留米大学	九〇	一九九		三一
四一	九三	五	熊本商科大学		一八六		三〇
四〇	九二	四	長崎大学		一八九		二九
三九	九一	三	九州大学(文学部)	九三	一九六	三〇〇〇円	二八
三八	九〇	二	琉球大学	七〇	一九一		二七
三七	八九	平成一	宮崎大学				
三六	八八	六三	九州大学(教養部)	八三			
三五	八七	六二	鹿児島大学	六一	一七七		二六
三四	八六	六一	九州大学(太宰府天満宮)	七七			
三三	八五	六〇	大分大学	六〇	一六〇		二五
三二	八四	五九	西南学院大学				
三一	八三	五八	琉球大学	四六	一五二	二〇〇〇円	二四
三〇	八二	五七	福岡大学			四〇〇〇円	
二九	八一	五六	佐賀女子短大		一四九		二三
二八	八〇	五五	九州大学(文学部)	一〇〇			
二七	七九	五四	熊本大学	九四	一三六		二二
二六	七八	五三	福岡女子大学				
二五	七七	五二	鹿児島高専		一二七	一〇〇〇円	二一

15 『九州中国学会報』 会報編輯規定

- 一、本誌は会員相互の研究を深め、且つその親睦を図ることを目的とする。
- 二、毎年四月より翌年三月までをその年度とし、五月の大会に於て年度の方針を決定する。
- 三、各県に世話人を置いて、原稿の募集並びに会員相互間の連絡を計る。
- 四、各県に於ては毎年十二月末を以て原稿を締切り、編輯人に送付する。
- 五、編輯会議によつて採用原稿を決定する。
- 六、本誌発行を三月末日とする。

(『九州中国学会報』第三卷所載)

16 九州中国学会会則

- 一、本会は九州中国学会と称する。
- 二、本会は中国の哲学・文学・語学等の研究と会員相互の連絡親睦をはかることを目的とする。
- 三、本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。  
毎年一回研究発表会の開催と学会誌の発行。  
内外諸関係団体との連絡。  
右研究に必要な事項。
- 四、本会は本会の主旨に賛同するものを会員とし、会員は年額四百円を納入するものとする。なお、維持会員を設け、維持会員は年額千円(会費四百円を含む)を納入するものとする。
- 五、本会の経費は会費・寄附金その他の収入によつて賄う。
- 六、会長一名、各県に委員二名を置く。但し会長の任期は三年、再選を妨げない。
- 七、本会の事務局は九州大学文学部に置く。

(『九州中国学会報』第十卷所載)

17 九州中国学会役員

(平成十四・十五・十六年度 五十首順)

会長(兼理事長)	岩佐 昌暉			
理事	會澤 卓司	荒木龍太郎	岩佐 昌暉	
	合山 究	菰口 治	近藤 則之	
	静永 健	柴田 篤	高津 孝	
	竹村 則行	野口 宗親	福田 殖	
	松崎 賜	森川登美江	山田 敬三	
理事役務分担				
會長(統括)	岩佐 昌暉			
總務(書記、文書、渉外、大会)	合山 究	柴田 篤	森川登美江	
會計(会費、出納)	静永 健	野口 宗親		
名簿(会員入退会、住所所属変更)		會澤 卓司	荒木龍太郎	
情報管理(名簿、会計関係情報処理)	近藤 則之	山田 敬三		
学会報(学会報刊行、発送)	高津 孝	竹村 則行	松崎 賜	
学会歴史(学会歴史編修、資料保存)	菰口 治	福田 殖		
学会報編集委員	岩佐 昌暉	合山 究	菰口 治	
	柴田 篤	竹村 則行	福田 殖	
	山田 敬三			
監査委員	石田 和夫	新谷 秀明		
選挙管理委員	藤井 良雄(委員長)			

18 九州中国学会会則(現行)

- 第一条 本会は九州中国学会と称する。
- 第二条 本会は中国に関する学術の研究と会員相互の連絡及び親睦をはかることを目的とする。
- 第三条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行なう。
- 一 毎年一回学術大会及び総会を開催する。
  - 二 毎年一回学会誌「九州中国学会報」を刊行する。
  - 三 内外関係諸団体との連絡を行なう。
  - 四 その他必要な事項を行なう。
- 第四条 本会は本会の主旨に賛同する次の会員からなり、会員は大会発表及び学会報投稿の資格を有する。
- 一 普通会员
  - 二 維持会員
  - 三 特別会員(会員歴二十年以上で前年度までに満七十五歳に達した者)
- ただし、満七十歳に達した維持会員は本人の希望により普通会员となることができる。会員の入退会規定は別に定める。

第五条 本会の経費は会費・寄付金その他の収入によって賄う。

第六条 本会の会費は次のように定める。

- 一 普通会員は年額三千円を納入する。
- 二 維持会員は年額五千円を納入する。
- 三 特別会員は会費の納入を免除する。

第七条 本会に次の役員を置く。

- 一 会長（理事長を兼ねる） 一名
- 二 理事 十五名
- 三 学会報編集委員 若干名
- 四 監査委員 二名
- 五 選挙管理委員 若干名

役員は維持会員の中から選ばれ、満七十歳を超えないものとする。ただし、年度の途中で満七十歳に達した場合はその任期を全うするものとする。

役員の選出方法は別に定める。

第八条 会長は本会を代表し会務を統べる。会長の任期は三年とする。再任を妨げないが、連続二期までとする。

第九条 理事会は理事十五名で構成し、会長の諮問に答え、

会務を補佐する。理事長は会長が兼務する。理事の任期は三年とし多選を妨げない。理事会の運営に関しては、必要な事項を別途に定める。

第十条 学会報編集委員は理事の中から会長によって委嘱され、編集会議を組織し学会報の編集にあたる。会長は必要な場合、論文査読委員を委嘱することができる。

第十一条 監査委員は本会の経理を監査し、その結果を理事会及び総会に報告する。監査委員は理事以外の会員の中から理事会の推薦を経て総会で承認する。

第十二条 本会の会計年度は毎年四月に始まり翌年三月に終る。

第十三条 本会則の変更は総会の決議による。

（付則）

- 一 本会の事務局は当分の間、九州大学文学部に置く。
- 二 本会則は前会則を改正したもので、一九九六年五月一日より施行する。

## 19 九州中国学会役員選出規定

- 一 会則第八条・第九条による会長及び理事の選出は次のように行なう。

理事は十名が全会員による選挙で選ばれる。  
会長は十名の理事の互選による。  
会長は五名の理事を委嘱する。  
理事の選挙は選挙管理委員がこれを行ない、その結果を会長に報告する。選挙管理委員は会長の委嘱によって選ばれる。
  - 二 会長及び理事の選出結果は総会で報告する。  
役員に欠員を生じた場合は次のように処理する。  
会長は改選する。

理事は選挙によるものは次点者を繰り上げ当選とし、会長委嘱によるものは新たに会長が委嘱する。ただし、その任期は前任者の残任期間とする。  
学会報編集委員は新たに会長が委嘱する。  
監査委員は理事会が新たに推薦し、総会の追認を得る。
  - 三 役員名は「九州中国学会報」に掲載する。
- (付則)
- 一 本規定は一九九六年五月一八日より施行する。

## 20 九州中国学会会員入退会規定

- 一 会員の入会は維持会員の推薦により、理事会の承認を経て総会に報告される。
  - 二 会員の退会は本人が会長宛てに申請し、理事会の承認を経て総会に報告される。
  - 三 会員が会費を連続三年間未納の場合は、事務局が本人に通知した上で退会扱いにする。
  - 四 会員の入会に関しては、理事会の承認を経るまでは、会員に準ずる者として受け入れる。
- (付則)
- 一 本規定は前規定を改正したもので、一九九六年五月一八日より施行する。

## 21 九州中国学会会員資格について（内規）

- (1) 九州地区の高专、短大、大学において常勤教員の職にある者は、維持会員とする。
- (2) 維持会員が九州地区外に転出の場合は、本人の意向を確認の上、普通会员とすることができる。
- (3) 満七十歳に達した維持会員は、本人の希望により普通会员とすることができる。（「会則」第四条三項による）
- (4) 会員歴二十年以上で前年度までに満七十五歳に達した者は、特別会員とする。（「会則」第四条三項による）

## 22 九州中国学会理事会運営内規

（二〇〇二年五月一日 制定）

- 1、理事会の開催  
毎年度定例の理事会は、原則として大会開催時に会長の招集により開催される。理事選挙の年次は選挙後、選挙によって選ばれた者が、新会長選出のため、現会長により招集される。この理事会の運営に関しては、第5項に定める。なお、会長が特に必要とする場合は、臨時に理事会を開催することができる。

### 2、議長

理事会は会長が議長となる。会長不在時は、理事の互選により議長を選ぶ。

### 3、成立

理事会は理事の三分の二以上の出席を以て成立する。なお委任状を以て出席扱いとすることができる。

### 4、議決

理事会の議決は出席者の過半数を以て決する。

### 5、理事の選出方法

(1) 理事選挙で当選する者は一〇名であるが、得票同数の場合は一〇名を超える場合でも当選とする。

(2) 現会長は当選者に受諾意思の確認を行う。辞退者がある場合は一〇名を満たすまで次点者を繰り上げる。

### 6、会長の選出方法

理事の互選による会長選出は、出席者の無記名投票並びに欠席者の不在者投票により行い、比較多数を以て当選とする。上位同数の場合は、同点者について出席者による再投票を行う。なお、欠席する場合は、必ず郵送による不在者投票を行うか、または委任状を提出するものとする。

### 7、旅費支給

理事選挙後の理事会に限り、福岡県外居住者には往復の交通費実費を支給する。

## あとがき

九州中国学会五十年史は菰口と福田の両名が中心となつて編集することが、一昨年の総会で決まつた。

五十年史の編集は「学会報」第三十八巻、四十巻に掲載された「九州中国学会の歩み」(一・三)を主要な材料とする方針で進められた。菰口と福田は、この基本方針をどのように結実させて五十年史を完成するかについて種々と相談し、その結果、記念写真や史料の補充、五十年史全体の文章構成等について、特に疋田啓佑・柴田篤両先生に協力援助を頼むこととなつた。

回想部分に関しては、それまで岡田武彦・荒木見悟両先生から九州中国学会発足当時の状況について、当事者にしかわからない貴重な証言をいただいております、同じく当事者として学会報創刊に多大の貢献をされた平岡禎吉先生から当時の思い出の文章をいただき、また当時、若手研究者として出発された上尾龍介先生からも文章を寄せられていて、草創期の九州中国学会のことが、かなり明らかになつていた。しかし、回想部分を更に充実するために、しかるべき方々にご寄稿をお願いした。

まず九州地区以外で密接な関係にあつた大塚博久先生(山口大学名誉教授)に寄稿を依頼し、次にシンポジウム「九州中国学会五十年の歩み」(平成十四年)で発表された秋吉久紀夫先生(九州大学名誉教授)と疋田啓佑先生(福岡女子大学名誉教授)に発表原稿を寄せていただいた。ついで各県代表者を長くつとめられ三度も開催校を引受けられた永末嘉孝先生(熊本学園大学)、更に昭和五十八年(一九八三)に沖縄県が初めて開催校を引受けられたことで会沢卓司先生(琉球大学教授)、そして最後に第六代会長をつとめられた岡村繁先生(九州大学名誉教授・久留米大学名誉教授)及び第七

代会長をつとめられた町田三郎先生（九州大学名誉教授・純真女子短期大学学長）にも、それぞれ寄稿していただくことができた。

第一部の「通史」と第二部の「回想」第三部の「史料」そして巻頭の写真等の構成によつて、五十年史は、少しく読みやすいものとなつたとすれば、「回想」部分の九篇の個性あふれる文章の力に負うところが大きいと言わざるを得ない。この五十年史は九州中国学会にさまざまな形でかわつてきた、また現にかかわつてゐる会員の方々の総力によつて完成したものである。ただ、九州中国学会創設時のことについてご寄稿いただいた平岡禎吉先生（元鹿児島大学名誉教授）が昨年（平成十五年）十二月二十二日（月）九十八歳でご逝去され、この五十年史を見ていただくことができなくなつたことは残念の極みである。今はただ平岡禎吉先生のご冥福をお祈りすると共に、先生に対して深い感謝の念をささげたい。

五十年史の「通史」及び「史料」の部分で誤まりや、補充すべき箇所が多くあることと思われるので、会員の方々のご叱正を賜りたい。最後に城島印刷の仲西佳文社長には、五十年史刊行に関して、多大なるご配慮をいただいた。ここに深く謝意を表したい。

二〇〇四年四月八日

菰口 治  
福田 殖

九州中国学会五十年史

平成十六年五月十二日 印刷  
平成十六年五月十五日 発行

福岡市東区箱崎六 一九一  
九州大学文学部内

編集兼 九州中国学会  
発行者

代表者 岩佐昌暲

福岡市中央区白金二 九六

印刷所 城島印刷(有)